

物象化生成過程的資本原蓄とアムステルダム

—— 一七世紀ネーデルラント商人資本に関するノート ——

酒 井 ^{あつ} 昌 ^み 美

目次

- [アムステルダムと七州]
- [オルデンバルネフェルト、グロチュウス、デ・ウィット]
- [アムステルダムの「陰謀」]
- [アムステルダム取引所・有価証券]
- [ネーデルラントの世界侵略]
- [ネーデルラントの海運]
- [世界経済における貴金属流入]
- [ネーデルラントの公債など]

カーチは、疎外論と物象化論との離接不全ということにも禍されて、そして彼がマルクスの労働論や対象的活動論の射程を若きヘーゲルのそれ（しかも彼ルカーチが一面的に矮小化した限りでのヘーゲルのそれ）に“還元”する位相でしか把えることができず、唯物史観の地平を十全に把えることができなかったために、突き放した言い方をすれば、ルカーチはマルクス主義をバウアー派的な準位に押し込めてしまっております」。^②

1 「労働疎外論はもともとその根底に人間の本质は労働であるというヘーゲ尔的労働観をもつものであった。それは労働力商品、必要労働・剰余労働という概念把握を媒介する助産婦的役割を果たしたが、必要労働・剰余労働という概念じしんによって、みづからの基礎とする労働観を否定される運命にあった。剰余労働という概念は、労働疎外論にとって、いわば鬼子だったのである。」^①

2 「ヘーゲルの『絶対精神』ないしバウアーの『自己意識』をプロレタリアートないしその階級意識ということで置換し、そこでフィヒテ・ヘーゲ尔的な疎外論・外化論のロジックで、当の『大主体』の自己外化と自己獲得を説くにとどまるとすれば、そしてバウアーが『批判』ということでは主観性と客観性との実践的統一を説いた構図に滞留するとすれば、この疎外論の構制はまだ唯物史観以前のものと評されねばなりませんまい。ル

[アムステルダムと七州]

レオ・バレットの著作「レムブラントとスピノザ」^③は、そのⅤ「十七世紀のオランダ」を七つに分けている。①経済（六ページ程）、②社会（一〇ページ程）、③政体（十二ページ程）、④法律（四ページ程）、⑤政治（四ページ程）、⑥道徳（二五ページ程）、⑦科学（二五ページ程）から成り立っており、ページの量からも推察されるように、⑥道徳は非常に重視されている。後述するように、物象化的視点からして同断である。

レオ・バレット（ロッテルダム出身、ブレーメン美術学校美術史担当教授^④）は、その⑤政治で次のように敘述している。「一六世紀と一七世紀のオランダの対内政策と対外政策は純粋に商業的な政策で……それはアムステルダムの取引事務所の窓から眺めた世界観であった。州議会および連邦議会の決議は、国全体（？存在したか——引用者^⑤）のためになされたことはほとんど一度もなく、もっぱらアムステルダム（十七世紀の人口は一〇

万であるが、十八世紀に始めに二〇万に及ぶ——引用者）のためになされた。商人たちは、彼ら自身の選んだ政治家で国の安寧福祉をば一握りの商人たちの利害の上におくようなことを敢てする者があれば、これを取り除いてしまうことさえ辞さなかった^⑥」と。「もっぱら金儲けのことばかり考えている都市」アムステルダムと、ゴイド・ファン・ズヒテレンは書いている^⑦。

英国の歴史家モーリス・アシュレーは言う。このネーデルラントの「七州は、本来、スペインの抑圧によりよく対抗できるためにのみ、かなりゆるやかな結合を見いだした。各州は、それ自身が行政機関を有していた。州はたゞ、その議員たちを、連邦議会の会議に、デン・ハークに派遣したにすぎなかった。こゝでは、対外政策がなされた（この点、今少しく詳細に後述するところがある——引用者）。そしてこの連邦議会の他の使命は、ユトレヒト同盟によってスペインから割譲された領域を行政管理することにあった。執行権力は、總督にあった。……オランダ州の重要性はすでに、そのなかで、全税金の六〇パーセントほどが徴収されたこと、またこの州が船舶の艤装を行なったこと、同様に戦争事態の際の大半の武器を準備したことに、表現されている。この州の指導的な都市が、アムステルダムであった^⑧」。

レオ・バレットは、この点の歴史性に——③政体でふれるところあるにもかゝらず——充分な分析的考慮を払っているとは思われないが、アシュレーも、ネーデルラントがその統治形態において、「西側世界の他の国々と全く異っていた^⑨」と言っているにもかゝらず、その近代国家成立過程論を十分に把握しているようには思われない。この点に関して、筆者に、論文「ブランデンブルク・プロイセン覚書（中）^⑩」で、P・ビルンボーム、B・バディの論旨をめぐり、示唆した。ネーデルラントは絶対王制を達成できなかった^⑪が、「オランダ経済史」（一九二七年）の著者エルンスト・バーシュの言葉を借りるならば、「半王制＝ハルベ・モナルヒー」の段階に達している^⑫。オランダを比較史的に位置づけるための——商人資本・金貸資本進展の視点よりする——、「スイス宣誓共同体」との一相違であり、物象化生成過程の一相違でもある。

【オルデンバルネフェルト、グロテュウス、デ・ウィット】

このアムステルダム商人資本に関する前記のレオ・バレットの敘述に引き続いて、レオ・バレットは次のケースについて指摘している。

アムステルダムのエゴイズムによる——

①「オランダの最も偉大な人物の一人であるホラント州——の元首の地位にあたる人物（引用者——法律顧問オルデンバルネフェルト）の斬首」（一六一九年）

②オルデンバルネフェルトの逮捕・斬首に連繋する「法律学者グロテュウス」（一五八三—一六四五）の監禁、処刑の危機とその後の亡命生活

③元首の地位にあたる「ホラント州法律顧問ヤン・デ・ウィットとその兄コルネリウスの投獄と、「官憲の黙認の下での暴徒による私刑」（一六七二年）を指摘している^⑬。

まず、③のヤン・デ・ウィット（一六七二年私刑）について。アシュレーは次のように記述している。

「ホラント州がイニシアチヴをとって、デン・ハークで、連邦議会の總會が招集され、ゲネラル・カピテンの役職を廃止し、陸海軍に対する管理を分権化する決議を行なった。将来は、少数の限られた上層部が統治能力を保持することとなった。……二年後には、もとの市庁法律顧問であるヤン・デ・ウィット（一六二五—七二）がホラント州の市庁法律顧問に任命された。彼はレヘンテン階層（＝統治階層）に属していた。……彼は勤勉な働き手、能力のある政治家、共和思想の確信的信奉者であった（引用者——こゝで、バレットの見解を述べておく。スピノザはホッブスと異なって——また、アントニオ・ネグリによれば、「スピノザの『神学・政治論』には契約論的視点があった。……『政治論』には契約論的視点が存在しない。これが注目すべき事実なのである。……スピノザの属した世界には契約論的権力委譲に対抗する二つの基本となる流れが認められる。すなわち、人文主義・ルネサンス文化に属する共和政的ラディカリズムの伝統であり、プロテスタンティズム、特にカルヴァン主義的な民主政的伝統に由来する流れである。前者ではマキャヴェッリが、後者ではアルトゥジウスがその代表的な理

論家である」^⑭——オランダの貴族政治を徐々に民主化していこうと考えており、ヤン・デ・ウィット^{マヒス・トランデン}の考えであった。「すなわち、都市の司法・行政担当者の地位はもはやレヘント層諸家族の特権であってはならないし、連邦議会が主権者とならなければならない。連邦議会の代表者たちに対する選挙人からの強制的要求はもちろんのこと、この代表者たちの拒否権もまた廃止さるべきである、というのである。商人たちは非常に動揺し、材木商出身のヤン・デ・ウィット……がハーグで賤民によって非業の死を遂げるのを黙認した」^⑮。しかし、オラニエ派は……総督なき時代に、決して完全に消滅しなかった。オラニエ家の信奉者たちは、デ・ウィットが、オリヴァー・クロムウェルとの密約（残念ながらほどなく漏れてしまったが）を結んだことに、絶対に同意しなかった。クロムウェルは、つまり、オラニエ派の指導者たちの権力を失なわせることを狙っていた。クロムウェルは彼としては、オラニエ派が同様に、結婚によって結びついていたスチュアート家——亡命生活をしている——のメンバーをさらに援助することを恐れていた。また教義を厳守するカルヴァン派の聖職者の間でもオラニエ派は信奉者を見いだしていた。それは、汚れなき選民^{レモンストラント}と考えている反建議派であった。二代目の総督、プリンツ・フォン・オラニエであるヨハン・モーリッツ・フォン・ナッサウ伯爵^{グロース・ラート・バン・ナッセル}は、実際に、（元首にあたる——引用者）市庁大法律顧問（オルデンバルネフェルト——引用者）に対し死刑を執行させることに成功した。……総督なき時代の間、デ・ウィットは、親フランス政策を追究した。フランスがオランダ人のように同じく、伝統的なスペイン反対者であったからである。しかしこの政策は失敗に終り、オラニエ家をまたも登場させることになる^⑯。

なお「(蘭) Pensionaris (英) Pensionary オルデンバルネフェルトの時まで Advocaat (英 Advocate) と呼ばれていたこの官職は、本来は州議会（州政府）における法律的事柄の助言者、スポークスマンであったが、法律や慣習についての習熟と、加えるに、その永続的任期（例えば、ホラント州においては、オルデンバルネフェルトの後には、五年と定められたが、殆んど常に更新された）の故に、議案の準備、起草、議

事の運営、決議事項の成文化、各種情報の提供、対外文書の交換等といった、州政府の殆ど總ての重要政務に関与し、必然的に州議会議長、州の最高指導者となった。特にホラント州の法律顧問は、例えばオルデンバルネフェルトやヨハン・デ・ウィットのような傑出した人物がその地位にあれば、七州の中でホラント州の占める圧倒的優位と相俟って、連邦議会においても指導的存在となり、全共和国に対して元首に近い地位を占めることができた。なお州の場合と同じく各都市にも法律顧問があった^⑰」と、バレットの訳注にある。非常に大まかには、デ・ウィットの虐殺はオラニエ公を中心とする王党派と、商人貴族、上層自由主義的市民を中心とする議会派の対立と言える（一七世紀末のブランデンブルグ選帝侯とダンチヒ都市貴族との対立とも類似するが、ネーデルランドでは貴族の力が非常に後退している）^⑱が、商人層のなかで孤立する——スピノザの友人である——デ・ウィットの共和思想の分析も重要なところである^⑲。当時十六・七世紀のヨーロッパの、いわば反王制的国家であるスイス宣誓共同体——さらには、ポーランド——には、オラニエ派にあたるものはない。これは物象化生成的過程からも留意するに値する。

②のグロチウスについては、レオ・バレットは、前記Vの4法律で、彼をもっぱら論じている意味では、確かに「彼らの最も偉大な法律学者」である。その四著作について論じられている。

- i 「捕獲品の権利についての論」(De jure praedae Commentarius) ——一八六八年に初めて出版。
- ii それの十二章である「公海」(Mare liberum) ——一六〇九年。
- iii 「オランダ法律学緒論」(Inleiding tot de Hollandsche Rechtsgeleerdheid) ——一六二〇年に執筆。一六三一年に出版。
- iv 「戦争と平和の法」(De jure belli ac pacis) ——一六二五年に完成^⑳。

レオ・バレットは、i 「捕獲品の権利についての論」では、「マカオからマラッカに向って航海していたポルトガルの優秀船カタリナ号」の私拿捕に関し、「東インド会社の理事たちは、当時ハーグで弁護士をしていた弱冠二〇才のグロチウスを

雇い、船舶の捕獲を正当化し、さらにその後の襲撃掠奪の道を淨めようとした^㉑。「私は……彼はその議論の多くをば眞面目に論じたのだと思っている。第一章において、彼は、捕獲品は神が敬虔なる民に授けて、神の慈悲と、彼らが神に選ばれたる民であることを示し給う恩恵の一つである、と主張している。さらにまた、彼は、人間がこの《合法的な》方法で自らを富ませば、他の人々に対してもいかに多くの善行を施すことができるだろうか、ということについてわれわれの注意を喚起する。彼は言う。『可能な限り多くの富める市民を持つことは、国家にとって必須不可欠のことではなからうか』と。

グロテュウスの著作をオランダ語に翻訳したオンノー・ダムステは、東インド会社がその原稿を決して出版しなかったのはなぜであろうか、という疑念を抱いた。彼は、その著作が一六〇五年には既に時宜に適ったものではなくなっていたのだ、と推測した。私はむしろ、東インド会社の理事たちでさえ、事実上あまりにも多くのことを立証しすぎているその本を避けたのだ、と考える^㉒。

ii の「公海」でも、グロテュウスは「再び、その主要部分にわたって、聖書、教父、古典からの引用によって要点を立証しようとしている。第二章において、彼は『権利とは、神が神の意志として知らせ給うところのものである』と論じている。それ故に、われわれは、神が世界を創造した時に神の意図したことは何であったかを探求しさえすればよいのである。……神の意図するところは明らかである。すべての民はそれぞれに異った要求と異った富を持っていて、たがいに依存し合ってゆかねばならない。……それゆえに、海洋の自由と貿易の自由が存在することは神の意志なのである。……しかし、一六一〇年に意外な事が起った。イギリスが、イギリス海岸の沖合で漁をしているオランダの船について苦情を申し立てた。グロテュウスや連邦議会の考えに従って、もし海がすべての国民に開放されているとすれば、オランダの漁夫たちは全く正しかったことになる。

それにもかゝらず、オランダ政府は自己の主張を撤回した。それではなぜ連邦議会は、突然、公海から領海を除外したのであろうか。一六一〇年

には、すべては公海である、という主張がオランダにとって以前よりも危険なものになっていたからである。…（従来の——引用者）主張は、東インド諸国に対する征服の時代にはオランダ人にとって非常に役立った。主要な島々を征服した後には、閉じられた領海を含む公海、という考えの方が、……有利であった。

一六二五年にはグロテュウスはそれまでの彼の理論を棄てた。この年の彼の著作『戦争と平和の法』の中で彼は《et mare occupari potuisse ab eo qui terras et letus utrumque possideat》（海は、その海の両側の土地を支配する国が占有し得る）とはっきり述べている^㉓。資本原蓄期と、権力が共和制下で隠微に《半王制》に到着した、或いは貴族寡頭制に到着した法イデオロギーである。

グロテュウス分析の傑出したものとして、ボルケナウのものがある。非常に長い、そのまゝ引用しよう。こゝでは、アルミニウス派グロテュウスの自然法論のカトリックとの親近性と差、グロテュウスの支配の把握の仕方、グロテュウスとアルテュジウス、中世的世界との関係等、自由に論じている（なお傍線は引用者のもの。以下の引用の場合も同じ）。

Auch die andere Hanptpartei der hollaendischen Klassenkampfes, die grßburgerlich-oligarchische, arminianische „Staatenpartei“, hat einen wesentlichen Beitrag zur modernen

Staatslehre geliefert. Ihr Theoretiker Grotius hat zuerst die Staatstheorie auf rein innerwelthlichen Boden gestellt. Doch Grotius fehlen andere wichtige Grundbegriffe des neuen Staatsrechts, vor allem der Begriff der Souveraenitaet. In Grotius Lehre sind Probleme der modernen Philosophie mit den rueckstaendigsten katholischen Gedankengaengen vermischt. Das hollaendische Patriziat war formell ein feudaler Stand. Die hollaendischen Staedteverfassung, aus denen sich die Privilegien dieser Schicht herleiteten, beruhen auf der reinen Patrizierherrschaft, der archaischsten Form der europaeischen Staedteverfassung. Die Parteistellung dieser

Schicht war daher zunaechst die allerstaendisch privilegierten Schichten. Sie kaempfte um die Gueltigkeit ihres positiven Rechts. Sie trat fuer die Unverletzlichkeit erworbener Privilegien ein. Sie wehrte sich gegen alle jene Ideologien, die aus der Verworfenheit der Menschen die Unvermeidlichkeit einer Macht ueber allen subjektiven Rechten der Untertanen ableiteten. Ihr Handelskampf gegen Spanien brachte sie daher in eine zwiespaeltige Stellung. Genoetigt, aus politischen Gruenden mit der Reformation zu gehen, war sie doch niemals ein vorlaeßlicher Anhaenger des reformatorischen Dogmas. Gegen Spanien verfocht sie die Lehre vom Widerstandsrecht, aber diese Lehre war ihr unertraeglich im Kampf gegen die Demokratie im eigenen Lande. Gegen die Demokratie haette sie gewißam liebsten die Lehre vom leidenden Gehorsam unter der gottgegebenen Obrigkeit verfochten, wenn dies nicht mit ihrer revolutionaeren Politik unvereinbar gewesen waere. So stand ihr das katholische Ideal einer hierarchisch gestuften Gesellschaftsordnung, deren Verletzung zum Widerstand berechtigt, am naechsten. Daher ihre Neigung, dem protestantischen Pessimismus das katholisierende Dogma von der Erkenntnis des Guten durch die bloße natuerliche Geisteskraft und von der Willensfreiheit entgegenzustellen. Auf diesem Dogma beruht ja die Einschraenkung der Herrscherrechte, die der Katholizismus dem reformatorischen Staatsabsolutismus entgegenstellte. Nimmt man den Kampf gegen das Konventikelwesen und die strenge Verfechtung der kirchlichen Hierarchie hinzu, so hat man ein in den wichtigsten Bestandteilen katholisches System vor sich. Als eine katholisierende Richtung werden denn auch die Arminianer von ihren calvinisch-orthodoxen Feinden aufgefaßt. Nicht ganz mit Unrecht zieh man sie versoehnlicher Haltung gegen Spanien; in England nahm Laud die arminianische Lehre zur

Basis seiner Rueckwaertsrevidierung der Reformation.

Konsequenterweise haelt der Arminianismus an dem alten katholischen Begriff des evidenten Naturrechts fest. „Naturrecht“ bedeutet ja, daß die Erkenntnis des moralisch Guten und eine relative Faehigkeit seiner Verwirklichung dem Menschen von Natur eigen sind. Indem Grotius diesen Begriff aufnimmt, ist er nicht wie man oftmals gemeint hat ein Neuschoeffer, sondern gerade ein Konservativer. Das dem Menschen unmittelbar evidente Naturrecht ist mit der Universalitaet der Vertragskategorie wie mit der mechanistischen Erklaerung der Gesellschaft unvereinbar. Doch bekommt das Naturrecht bei Grotius einen neuen Sinn. Die katholisierende Tendenz des Begriffs wird durch eine Gegentendenz gebrochen. In feudalen Formen war das hollaendische Patriziat gleichwohl die modernste kapitalistische Klasse Europas. Hieraus ergeben sich unloesbare Konflikte mit dem Katholizismus. Von diesen war ihr Erastianismus, die strenge Unterordnung der Kirche unter den Staat, noch der geringste; schwerwiegender war ihre Neigung zu religioesen Toleranz, die immerhin durch das Bestreben nach Wiederherstellung einer weltumfassenden christlichen Kirche verdeckt war. Entscheidend war, daß sie die staendischen Vorrechte zwar fuer sich in Anspruch nahm, eine staendische Organisation der Gesamt-Gesellschaft aber nicht wollen konnte. In der Brechung der Privilegien von Zuenften und Landadel, der Durchsetzung der Handelsfreiheit nach innen, der rücksichtslosen Durchfuehrung kapitalistischer Wirtschaftsprinzipien ging sie ungleich weiter als die oranische Partei. Eine Moral der gebundenen Lebensordnung kam daher fuer sie nicht in Betracht, daher auch nicht die Fiktion einer in Gott gipfelnden staendischen Pyramide, einer Stufenordnung staendischer Rechte und Pflichten. Sie lehnte das calvinische Dogma von der Verderbtheit der Menschennatur ab, weil es untrennbar vom

Regimentalismus war, aber nahm doch nicht das katholische Dogma der hierarchischen Gue-terordnung an. Dadurch wird das Naturrecht des Grotius zu etwas von dem katholischen Naturrecht des Mittelalters voellig verschiedenem. Das Naturrecht legt nicht mehr eine verneunftige, d.h.die Befriedigung aller natuerlichen Triebe ermoeoglichende Gesellschaftsordnung fest. Es wird von der Nuetzlichkeit einerseits, der Religion andererseits losgeloest.

Das Naturrecht des Grotius unterscheidet sich formell von dem Naturrechtsbegriff der orthodoxen Calviner, insofern es nicht subjektive Rechte der Indeividuen, sondern Grundsaeetze eines objektiven, zwischen den Menschen gueltigen Rechts beinhaltet. Insofern deckt es sich mit dem alten katholischen, thomistischen Naturrecht. Aber losgeloest von religioeser Zielsetzung wie von irdischen Zweckmaegigkeitserwaegungen, bekommt es seine eigene Evidenz. Es wuerde auch gelten, wenn es – ein Frevel zu denken – keinen Gott gaebe. Das ist Grotius' erster Satz. Daraus folgt das arminianische Grund-dogma, daß die Menschen selbst imstande sind, das Gute zu erkennen, und daß ihr Wille frei ist, es zu verwirklichen. Nur eine Nuance scheint diese Lehre vom mittelalterlichen Katholizismus zu trennen. Auch dieser lehrt die natuerliche, nur durch den Suendenfall relativ verdunkelte Faehigkeit des Menschen zum Guten. Er trifft sich darin mit dem Arminianismus, der auch die Rolle des Sundenfalles nicht leugnet und daraus ganz mittelalterlich-katholisch die Notwendigkeit des Zwangsrechts ableitet. Ist doch die Basis, die entschiedene Ablehnung des welt-lichen Absolutismus bei Anerkennung bedingter Herrschaftsrechte dieselbe! Aber die Nuance ist gleichwohl entscheidend. Denn die Arminianer folgern, daß die von Gott gegebene natuerliche Einsicht und Willensfreiheit den Menschen instand setzt, das Diesseits ganz aus eigener Kraft zu regeln,

nur fuer die Ge-winnung des Jenseits bleibt die goettlich Gnade erforderlich. Die volle Trennung von Jenseits und Diesseits, von Religion und Alltag, ein durchaus antikatholisches Prinzip, ist die Folge. Zum erstenmal wird die Autonomie der menschlichen Vernunft direkt proklamiert; selbst die Religion wird ihr, als vernuenftige Religion, untergeordnet. Was im Alltag keine Rolle spielt, wird zur Nebensache fuer Parteien, die eben den Alltag zu beherrschen wuenschen: die geoffenbarte Religion wird zum Privaterlebnis, und nur die vernuenftige Religion bleibt von oeffentlicher Bedeutung. Doch dies gehoert nicht mehr in unseren Zusammenhang. Wir bemerken nur noch, daß mit der Notwendigkeit der Erloesung die Notwendigkeit der Person Christi verschwindet. Wenn sich der Arminianismus zur Christologie inkonsequent verhielt, so darum, weil sie fuer ihn unwesentlich war. Dicht vor den katholischen Konsequenzen biegt der Arminianismus ab, vom Christentum weg auf den Deismus zu. Indem er die letzten Konsequenzen der Trennung von Diesseits und Jenseits zieht, verwirklicht er die Grundtendenz der Reformation, in der diese Trennung von vornherein angedeutet war.

Grotius hat das rein innerweltliche Naturrecht begruetet. Was ist sein Inhalt? Es ist durch den Wunsch bestimmt, die aristokratischen Privilegien der hollaendischen Oligarchie zu verteidigen, ohne eine durchgehende staendische Ordnung der Gesellschaft anzuerkennen. Dadurch bekommen diese Privilegien einen positiv-rechtlichen Charakter. Dieses positive Recht darf so wenig aus einem abaenderlichen positiven Gesetz als aus einer ewigen natuerlichen Ordnung abgeleitet werden. Der erste Gesichtspunkt fuehrt zur Beiseiteschiebung des Souveraenitaetsbegriffs; keine oberste Gewalt ueber den Vertraegen! Der zweite fuehrt zur Einschraenkung des Naturrechts eben auf den

Satz von der Heiligkeit der Verträge. Darin, in der Heiligkeit und Unabänderlichkeit geschlossener Verträge liegt der ganze Inhalt und der ganze Sinn des Grotiusschen Naturrechts. Ausdrücklich zählt er Eigentum und Vertragstreue samt ihren notwendigen Annexen Schadenswiedergutmachung und Sühne als Inhalt seines Naturrechts auf. Der prägnanteste Satz des Grotiusschen Naturrechts ist bekanntlich, daß man auch seine Freiheit vertraglich bindend aufgeben kann.

Es ist eine durchaus paradoxe Lage: Die Kategorie des Vertrags ist auch für Althusius' Lehre vom Gesellschaftsvertrag grundlegend. Formell tut Grotius nichts, als den grundlegenden Charakter dieser Kategorie rein herauszuheben. Damit hat er das bürgerliche objektive Naturrecht begründet. Es unterscheidet sich von dem subjektiven Naturrecht, dessen Höhepunkt Althusius bildet, nicht im Material der naturrechtlichen Sätze, sondern darin, daß es sie aus subjektiven Ansprüchen zu objektiven Normen macht; durch den optimistischen Glauben an die Immanenz solcher objektiven Normen im Menschen also. Der pragmatische Sinn dieser Wendung ist klar. Wenn die Vertragstreue nicht bloß Formalgrundsatz, sondern ewige, unabdingliche Grundlage einer guten Gesellschaft ist, wird die Souveränität unmöglich. Das vertraglich erworbene Recht steht nun über jeder aus der Verderbtheit der Welt abgeleiteten Zweckmäßigkeitserwägung. So eliminiert Grotius die Widersprüche zwischen Herrschaft und Formalrecht, das Grundproblem der bürgerlichen Staatslehre, so kommt er durch einseitige Übersteigerung der einen der beiden grundlegenden Kategorien, des Vertrags, gegenüber der anderen, der Herrschaft, zu einer bürgerlichen Verteidigung feudaler Herrschaftsformen. Die Herrschaftsrechte der Oligarchie entstammen privaten Verträgen; wie im Feudalismus gibt es für Grotius keine Grenze zwischen Privatrecht und Staatsrecht.

Aber der private Anspruch der Oligarchie ist vertraglich, d. h. durchaus bürgerlichen Charakters. In dieser Durchdringung bürgerlicher und feudaler Denkelemente liegt die starke Anziehungskraft der Lehre des Grotius für alle Schichten, die einen bürgerlichen Lebensinhalt mit feudalen Privilegien verbanden.

Grotius hat als erster auf dem Gebiet der Staatslehre die innerweltliche Vernunft zum Richter in allen Streitfragen bestellt. Dilthey hat ihn daher zu der großen, mit dem Neustoizismus anhebenden Reihe von Vertretern der Autonomie der Vernunft gezählt, denen er die Begründung des modernen Denkens zuschreibt. Aber gerade an Grotius wird offenkundig, daß die These Diltheys einer erheblichen Korrektur bedarf. Wenn Grotius der menschlichen Vernunft unmittelbare Einsicht in das Gute und Wahre zuspricht, so ist er darin viel mehr mittelalterlich als modern. Die ausschließliche Schätzung der göttlichen Offenbarung gegenüber dem *lumen naturale* ist protestantisch, nicht katholisch. Freilich hat Grotius der Lehre vom *lumen naturale* eine innerweltliche Wendung gegeben, die dem Thomismus durchaus fremd ist. Aber auch diese ist nicht so modern wie sie scheint. Es wird noch zu zeigen sein, daß die Idee der Autonomie der Vernunft, wie sie Grotius lehrt, und der damit zusammenhängende Grundsatz der religiösen Toleranz die eigentlichen Schöpfer des modernen Weltbilds, die großen Mechanisten, durchaus nicht so sehr beherrscht hat, wie Dilthey meint. Dieser Grundsatz ist bei Grotius durch alle Voraussetzungen seiner Lehre gefordert; bei Descartes und Hobbes aber ist er überwiegend bloße Maske. Sie wollen das Diesseits und das Jenseits verknüpfen, der erste in einem tief religiösen, der zweite im atheistischen Sinn. Denk- und gar Glaubensfreiheit sind ihnen durchaus fremd. Aber dies ist nicht das Wichtigste. Alle große Problematik der modernen

Welt ist aus dem Versuch entstanden, das irrationale Schicksal des bürgerlichen Individuums in einer bösen Welt rational und optimistisch zu deuten. Der Grundbegriff, von dem alle Begründer des mechanistischen Naturbilds wie die großen Staatslehrer, Althusius, Hobbes, Spinoza, Rousseau, ausgegangen sind, ist: Herrschaft. Auch wo, wie bei Descartes, dieser Herrschaftsbegriff im Endresultat in einer vernünftigen Weltordnung aller Härte entkleidet wird, gilt es doch, seine Vernünftigkeit zu deduzieren. Aber die Evidenz des Naturrechts bei Grotius dient nicht der Deduktion der Herrschaft, sondern ihrer Eliminierung. Er hat nicht versucht, das Grundproblem des bürgerlichen Daseins zu lösen, er hat es umgangen. In seiner Idee von der unmittelbaren Erkennbarkeit des moralisch und juristisch Guten liegt nicht nur kein Antrieb, sondern eine direkte Schranke gegen die Entwicklung der mechanistischen Naturanschauung. Es geht schon aus unserer bisherigen Darstellung der Entwicklung des Naturgesetzbegriffes hervor, daß die moderne Naturwissenschaft die stärksten Antriebe aus dem Bemühen bekommt, die auf dem Gebiet der Gesellschaft unlösbaren Antagonismen durch Rekurs auf das Naturverständnis zu lösen. Was sollte zu diesem Versuch eine Richtung beitragen, die diesen Antagonismen nicht nur Lösbarkeit innerhalb der Gesellschaft, sondern dieser Lösung gar noch unmittelbare Evidenz zuschreibt! Dilthey reproduziert die aufklärerische Lehre, es handle sich bei der Entstehung des modernen Weltbilds nur um die Befreiung des menschlichen Geistes von den Fesseln der Theologie; diese vollziehe sich in der Proklamierung der Autonomie des *lumen naturale*; der Rest ergebe sich dann von selbst durch das Einstroemen der freien Empirie. Unsere Darstellung gilt zum großen Teil der Widerlegung dieser Meinung.

Die Idee der unmittelbaren Evidenz des Naturrechts kann freilich auch mit anderen

Inhalten ausgefüllt werden als dem bloßen Schema von Eigentum und freiem Vertrag. Dies ist zunächst der Fall bei den demokratischen Sekten, die auf das natürliche Licht ein demokratisches Naturrecht begründen. Besonders schroff kommt der Gegensatz zwischen dem von Hobbes weiterentwickelten Althusiusschen Gesellschaftsvertragsschema und dem erweiterten Grotiusschen Naturrecht in dem berühmten Gespräch zwischen dem Protektor Cromwell und Fox dem Begründer der Quaker, zum Ausdruck. Gegen Cromwells harte Durchführung der Souveränität sprach Fox von der natürlichen Fähigkeit der Menschen, das Gute zu erkennen. Cromwell erwidert, dies sei ein bloß natürliches Licht; Fox gibt zurück, das natürliche Licht sei wohl zugleich ein göttliches. Auch hier dient die Berufung auf die Evidenz des natürlichen Lichts der Abschwächung der Souveränität. Das gleiche ist der Fall – was unseren Rahmen überschreitet – im Wolffschen und Kantschen Naturrecht.

Aber solches Vorbeigehen an den durch die gesellschaftliche Realität gestellten Problemen muß in Widersprüchen des Systems zutage treten. Sie finden sich eben in dem, dem Ganzen zugrunde liegenden Begriff der Evidenz des Naturrechts. Er begründet ein ganz paradoxes Verhältnis zur Religion. Das Naturrecht wird zwar von jeder inhaltlichen Beziehung auf ein konkretes Dogma gelöst, aber sein Geltungsanspruch gegenüber den entgegenstehenden Trieben kann nur auf dem Urteil einer obersten göttlichen Instanz beruhen. Jetzt ist das zuerst bei Cusanus auftretende Problem auf die Spitze getrieben. Das gottsuchende Herz war für Cusanus die Verheißung Gottes inmitten einer Welt böser Triebe. Für Grotius bedarf umgekehrt der moralische Instinkt, um zu gelten, göttlicher Weihe. Der Deismus ist vom Standpunkt des Grotiusschen Naturrechts zwingend gefordert. Der mittelalterliche katholische Gott tut

Wunder, um die im ganzen gesicherte materielle Gerechtigkeit zu wahren, wenn sie im Einzelfall gestoert ist. Der reformatorische Gott tut keine Wunder mehr; er tat sie, um sich zu offenbaren und dadurch das positive Gesetz des alten und des neuen Bundes zu promulgieren, das er allein den Menschen geben konnte, Der Gott des Arminianismus und der Aufklaerung tut Wunder nur mehr, um seine Existenz au ß -erlich zu beweisen. Denn nur mehr auf seine blo ß e Existenz kommt es an. Den Inhalt des Sittengesetzes braucht er die Menschen ja nicht zu lehren; aber durch seine Existenz hat er das eigentlich groe ß te, staendigste aller Wunder zu garantieren: da ß das Sittengesetz inmitten einer ihm gaenzlich heterogenen Welt gilt.

Der Deismus ist keine blo ß e Akkommodation,er ist ein wesentlicher Bestandteil des aufklaererischen Naturrechts. Aber er genuegt nicht zu dessen Begrueundung. Es soll ja gelten, ohne da ß Gott es ausdruecklich promulgiert hat, aus der blo ß en natuerlichen Einsicht der Menschen. Sein Inhalt kann also nicht aus seiner religioesen Wurzel abgeleitet werden. Seine unmittelbare Evidenz aber ist pure Fiktion; nicht nur in dem allgemeinen Sinn, da ß jedes „ Naturrecht “ historisch bedingt ist, sondern in dem konkret-historischen, da ß in langer Entwicklung von den Nominalisten und Macchiavell bis Montaigne das Nichtvorhandensein naturrechtlicher Saetze bewiesen worden war. Zu seiner Verteidigung mu ß Grotius versuchen, das Naturrecht abzuleiten. Damit aber faellt seine gesamte Anschauung. Was bewiesen werden kann, ist nicht evident; aber seine ganze Rechtsanschauung beruht darauf, da ß kein Ma ß stab der Zweckmae ß igkeit an das unerschuetterliche Vertragsrecht angelegt werden darf. So kann denn auch die Ableitung des Naturrechts nicht konsequent sein. Es bleibt bei einer Reihe widersprechender Ansaetze. Der consensus omnium gilt Grotius nicht als Beweis, sondern nur als Hinweis darauf, da ß allgemeine Gruende fuer

allgemeine Erscheinungen vorliegen muessen. Der Versuch, die letzten naturrechtlichen Grundsaeetze zu systematisieren, programmatisch pomphaft angekueundigt, wird nicht gemacht. Letzten Endes ist es doch der common sense, der sie stuetzen mu ß . Mindestens ein Schein der Ableitung soll aber doch gegeben werden. Kaum versucht, sprengt er das System. Es ergibt sich, da ß die Menschen einen Sozialtrieb besitzen, zu dessen Befriedigung sowie zu besserer Gestaltung ihres Daseins sie die Gesellschaft schufen, die ohne die drei oben genannten naturrechtlichen Grundsaeetze nicht bestehen kann. Aber indem er das Recht dem Trieb und der Nuetzlichkeit unterordnet, durchbricht Grotius seine Grundlehre von der Unabhaengigkeit von Recht und Nutzen. Nun muessen die beiden durch den Satz verbunden werden, da ß jeder, der sich auf andere verlassen mu ß , auch sich anderen verlae ß lich erweisen mu ß , um auf sie rechnen zu koennen. Also „ honesty is the best policy “, ein Hauptsatz des religioesen Optimismus. Doch dieser Grundsatz genuegt ihm selbst nicht. Nicht immer ist das bestehende Recht das nuetzlichste und nicht immer Ehrlichkeit die beste Politik. So sieht sich Grotius gezwungen, seinen religioesen Optimismus zu durchbrechen und nicht nur— wie selbstverstaendlich— das Zwangsrecht, sondern das Eigentum selbst auf den Suendenfall zurueckzufuehren. Die Welt erweist sich als boese, ihre Grundinstitutionen entstammen nicht dem freien Willen zum Guten, sondern dem Zwang der Konkupiszenz.

Dieser Bruch ist nicht zufaellig. Die Konzeption eines vom materiell Guten getrennten, sei es formellen, sei es materiell bestimmten Rechts, ist Folge und Ausdruck der Unmoeglichkeit, die gesellschaftliche Ordnung mit den Vorstellungen von dem, was sein soll, in Uebereinstimmung zu bringen. Die Evidenz der buergerlichen Moralprinzipien ist blo ß e Fiktion, der durchgehende Gegensatz von Recht und Trieb liegt der ganzen Konzeption des von

der Nuetzlichkeit getrennten Rechtes zugrunde. Das Recht behalt seinen Charakter einer bloßen Schranke des materiellen Interesses. Der innerweltliche religioese Optimismus, wie er im Arminianismus entsteht und zum Deismus fortgeht, kann diese Grundlage nur leicht verdecken. Bei jedem Versuch der naturrechtlichen Ableitung konkreten Rechts scheint sie sofort durch. Daher die Berufung auf den common sense als letzte Instanz bei all diesen Schulen. Es wird gerade das als evidnet vorausgesetzt, was fragwuerdig wird und zu beweisen waere. Grotius, der die kapitalistischen Interessen seiner Partei vermittelt der Verteidigung ihrer staendischen Privilegien verfocht, war nicht in der Lage, dies aufzudecken. Er mußte vielmehr die Gegensaezte gegeneinander in falschen Kompromissen abstumpfen. Alle Begriffe der neuen Zeit sind bei ihm vorhanden: die natuerliche Moral und die Suendigkeit des Menschen, die Unverletzlichkeit erworbener Rechte und gelegentlich, wenn auch abgeschwaecht, die Souveraenitaet mit dem Gesellschaftsvertrag, die Absolutheit des Rechts durch common sense und der Utilitarismus. Aber keines dieser Elements ist in seine Konsequenzen verfolgt. Eben diesem Umstand verdankt sein Hauptwerk seine ungeheure Popularitaet.

Doch trotz seiner Flachheit hat der Versuch des Grotius, nach mehr als einem Jahrhundert konsequenten Pessimismus eine selbstaendige Sphaere des natuerlichen Rechts zu statuieren, tiefe grundsaeztliche Bedeutung. Dieser Versuch bringt zum Vorschein, daß Recht und Moral auf sich selbst begruetet werden muessen, weil sonst innerhalb der auf egoistische Triebe begrueteten Welt alle Folgerungen des Pessimismus unvermeidlich sind; daß sie aber aus eben diesem Grunde nicht auf sich selbst gestellt werden koennen, weil sie dann ohne jeden Bezug auf die wirklichen Triebkraefte des Geschehens sind. So erscheint bei Grotius zum erstenmal ausdruecklich die Disparatheit der beiden

grundlegenden Lebensgebiete, bzw. Betrachtungsweisen, der Triebe und der Ordnungen, der Natur und des Rechts, der Ursachen und der Normen. Sie koennen nicht als Einheit begriffen, sie muessen aber gleichwohl zusammengebracht werden: Das okkasionalistische Paradoxon des Verhaeltnisses von Denken und Sein. Es hat alle moderne Philosophie bestimmt. Bei Grotius ist es hinter der oberflaechlichen Postulierung der Selbstaendigkeit der Lebensgebiete erst im Umriß erkennbar. Als das Problem des Denkens des menschlichen Daseins als vernunftiger Einheit von konsequenten buergerlichen Gruppen aufgenommen wird, wird es sogleich zur Hauptschwierigkeit. Dann entsteht die Aufgabe, eine Kausalgesetzlichkeit zu finden, die, als Kausalgesetzlichkeit, unter Vermeidung jeder Finalitaet, doch zugleich Normgesetzlichkeit ist. Das ist das Problem des mechanistischen Rationalismus.^② (この原稿はドイツで執筆された。邦訳の当該ページを見られたい)

①の「オランダの最も偉大な人物の一人であるホラント州法律顧問オルデンバルネフェルト」の斬首（一六一九年）に関して、バレットは、アムステルダム市によるこの国の支配を指摘している。「偉大な法律学者ヒューボ・デ・フロートは《aristocratique regieringe》あるいは《regieringh der notabeln》すなわち、名士あるいは貴人による統治を完全に是認した。……普通の市民たちは政府での地位を与えられることはあり得なかった。ホラント州法律顧問オルデンバルネフェルトも、同じく貴族政治的統治形態を擁護した。すなわち『国家あるいは都市に起こり得べき最も悪い、最も不健全にして有害なことは、人民が法を定めることであろう……私の五〇年にわたる経験は私に、下層の一般大衆に隷属するよりは上層階級の圧制に服する方がましである (better verheerd dan verknecht) 』ということを教えてくれた』と^②。グロティウスもほぼ同様な見解であると考えられる。^③このような考え方は、宣誓共同体であるスイスの場合には、比較的見当らないように見えることは、留意する必要があ

る。

また、こゝに、オルデンバルネフェルトと、数十年後の、前述のスピノザ、ピーテル・ド・ラ・クール、ヤン・デ・ウィットとの違いがある。オルデンバルネフェルトと組んでいるのはグロテュウスである②。

* * *

なお付言すれば、オランダの貴族政治的統治形態に対する二反対勢力は、カルヴァンの「キリスト教綱要」にその拠り所を置くカルヴァン派の小ブルジョアと、アルトゥジュウスの「統治法提要」（一六〇三年）にその拠り所を置くオラニエ派があった。カルヴァン派は神権政治を、アルトゥジュウスは一種の独裁君主制のカトリック教会制を望んでいたと。バレットの記述である③。しかし後述の柴田助教授のように、カルヴィニズムの歴史の変貌を考えるべきであろう。渡辺公平氏の「カルヴァンとカルヴィニストたち」は、カルヴァン以後、ピューリタン「運動の中に聖書の眞理（教理といってもよい）の実際の適用という点において、時代を画するものをもった」（小峯書店 1977 64 ページ）と言う。

しかし、エルランゲン・ニュルンベルク大学法哲学・公法のラインハルト・ツィペリウス教授の「国家理念史」では、その前後の編別構成は以下のようにになっている。Ⅲ主権国家成立は、10 トマス・モア、後のユートピストたち 11 マキャヴェリ 12 ホッブス 13 民主主義の理念 a) アルトゥジュウス b) スピノザ c) ルソー d) 代議制民主主義の理念 14 政治権力の管理と個人の権利 a) ロック b) モンテスキュー 15 近代自然法 a) グロテュウス b) プーフENDORF c) トマジウス d) ライプニッツ e) クリスマン・ヴォルフ の構成となっている。アルトゥジュウスの箇所では、バレットの見解とは異なって、a) アルトゥジュウス b) スピノザ c) ルソー……として把握するとともに、アルトゥジュウスが「政治権力は、——多様に編成された——人民を基礎としている契約思想と考え方に活力を与えた（……）。この理念のために彼は、彼が大享生活を送ったスイスで、カルヴァン（……）や同様にルソーのように類似して、模範を見いだそうとした。とりわけ、彼は……ネーデルランドのスペインからの

離反に伴う思想によく通じていた。つまり、国家的権威は人民・等族身分にあり、統治者は委託された権力を保有するにすぎない……という理念によく通じていた。……ボーダンとホッブスと違ってアルトゥジスは祖述している。……」と言う④。しかし東京大学の柴田壽子助教授「スピノザ政治論とカルヴィニズム—社会契約論から日常権力の解析学へ」で、「オラニエ公は、神から共同体（＝人民）全体に付与された主権を擁護する抵抗運動の指導者から、中央集権的権力の樹立とカトリック勢力下にある南ネーデルラント（現在のベルギー）の併合を画策する君主的存在へと変貌し、オラニエ党派との結びつきを強めつゝあったカルヴィニストは、抵抗運動の主体から『国教会』の徒へ（1651）、さらに他宗派に対する異端審問考へと変っていった。スピノザ（の言う—引用者）…『偽りの宗教』とは、主として頑迷で非寛容な当時のオランダ・カルヴィニズムを指している」と言う。また、この視点からだけでも、アルミニウス派をアングリカンと比定するわけには、いかない。⑤⑥

* * *

もっとも——レオ・バレットの言うように——總督オラニエ公ウィレムの態度のたび重なる変貌が問題である。

まず「青年ウィレムは皇帝カルル五世の宮廷で教育を受け、そこでルター派の父親の許可を得て、ルター主義からカトリック教に改宗した。理由は、彼の経歴にとってはカトリック教の方が都合がよかったからである。……ウィレムは北部ホラント、南部ホラントおよびゼーラントの諸地方の總督に任命された。……オランダ人は……公然と起ち上がった。ウィレムはネーデルラントで最も富裕な人間であった。一五六七年には、彼の収益は、ネーデルラントにおけるものだけで年に總額一五万三千リーヴルに上り、それは他のネーデルラントの上級貴族に属する者の収入を全部合わせたものよりも多かった、ということが知られている。彼は誰の側につくべきであろうか。……。さし当り彼にとって最上策は、双方の側と密かに結託し形勢を傍観することであった。（これは、チャーチルの先祖にあたるモールボロー公爵の態度に類似する——引用者。）スペイン王およびネーデルラントの女性統治者マ

ルガレータに宛てた一五六一年の手紙の中では、彼は献身的カトリック教徒にしてスペイン王の忠節な臣下としてふるまい、一方では叛徒たちと交渉を保ち、あらゆる議会に異端者たちを保護した。一五六一年に彼はザクセンの王女アンナと結婚した。彼女はルター派であったが、彼は彼女が必ずカトリックになるであろうと考え（たが——引用者）……彼の未来の義父にあてた同じ年の手紙の中では、彼は自分の子供たちを……（アウグスブルクの信仰告白に基づく本当のキリスト教的信仰の中で）、それゆえ、プロテスタントとして教育することを約束した。一五六一年の教皇に宛てた手紙の中では、彼は《post sanctorum pedum oscula》（教皇の神聖なる足に接吻した後で）、自分は……オラニエ公領内において……（異端の害虫）を根絶することを固く決意している、と告白した。……………枢機卿グランヴェーラは彼に《Taciturnus》という不名誉な呼び名を与えたが、それは汚い政略家という意味であった。後になってオランダの歴史家たちはその《Taciturnus》という語を《黙り者》と翻訳した。そしてこのドイツの領主は黙り者〔沈黙公〕として歴史の中に歩み入ったのである⑩。「オラニエ公ウィレムは常に小ブルジョアジーの側にいた。彼ら小ブルジョアジーは本当に正統的な改革派カルヴァン主義者であったのだろうか。そして、彼らはオランダに《神の国》を見出そうとしたのであろうか。断じて否、である。彼らは宗教などは意に介さなかった。オラニエ公ウィレムは、ルター派であったのがカトリック教に改宗し、再びルター主義に変わり、一五七三年にはカルヴィニストになった（しかし一度たりともカルヴァン派内部のレヘント的（！）ブルジョアとも密着するアルミニウス派——後述——に加担することはなかった——引用者）。彼の宗教は彼の四度の結婚と同様に政略であった。彼の息子のオラニエ公マウリッツは熱狂的なカルヴィニストであるふりをしたが、たゞ彼は、彼が自ら述べたように、予定説が《青か緑か》を知らなかった。しかしオラニエ家は小市民の側についた。なぜならば、小市民はレヘント層に反対する武装した同胞だったからである。オラニエ家が望んでいたのはその国を支配することであり、それ以外の何ものでもなかった⑪」と。冒頭にのべた《ハルベ・モナルヒー（＝半王制）》の問題である。

こゝには、たとえば、絶対主義の一要件である常備軍をもたぬことも含まれていよう。そしてそれにすぐ続いて「そして哲学者アルトハウス（＝アルトジュウス——引用者）は彼らに奉仕する従僕で」、その主著「統治法提要」（一六〇三年）の二五章には「『彼〔ヴィルヘルム・ルードウィヒ〕はまさにオラニエ家の意志固き勇者であった』という讃辞を載せている。アルトハウスによれば、統治権は人民に基礎をおいている。しかしながら、彼にとっては、人民とは一握りの貴族主義者たちではないが、カルヴァン派の大衆にほかならなかった⑫）。しかし前述の柴田説も考慮に入れる必要がある。

* * *

オルデンバルネフェルトの斬首（一六一九年）にもどらう。彼の貴族政治的統治形態擁護が彼の言う上層階級に裏切られるところを、どう解釈するか。オルデンバルネフェルトについては、フランスの歴史家アンリ・メシュラン（Henry Mēchoulan, Directeur de Recherche am Pariser Centre National de la Recherche scientifique）の著書に一〇ページほど、そのかなり詳しい敘述が見られる。8章から成り立っており、三章が「商人の徳・商品の徳」^{トヴァーント}に引き続き、四章「いかに自由は計算違いに手向うか」で、この四章である。

そこで言う——。

オルデンバルネフェルトは戦争を終結し^{ラント}国土に健全財政を保証しようとしたが、それに対してモーリッツ・フォン・ナッサウは厳格なカルヴァン派の党派的な助けをかりて、カトリック・スペインに反対する戦争を選んでいる。王位に達するのは、これが彼にとってもっとも確実な道と考えられるからである。政治的・宗教的緊張は、その自己の利害に^{インテレッセ}反することになる商人層の計算違いによって——一連の短期的に利益の多い企業に魅せられて、彼らは、根本的に思い違いし、彼らの金銭欲を正しい信仰への誓いによって隠す——強められた。……若干の商人層・レヘント層は、戦争が和平よりも多く利潤を約束すると納得させられて、彼らの本来の敵の陣営へ、つまりオラニエ派に走った。政治状況の、この短視的な愚かな評価は、同時に利潤の誤まった打算であった。

連続する諸事象と密接にからまり合った神学的・政治的・経済的モチーフを一瞥すれば、

ボイテ・ルスティヒ ハブギール

略奪に飢えている・食欲な・それにもかゝらず
信仰心ある男たちが貨幣を迅速な暴力によって達
成された儲けとして――勤勉な商業の結実として
でなく――把握するならば、なぜ貨幣が長期的視
点からは粗悪に投資されたかゞ、理解される^⑩、
と。メシェランは、恩寵を否定して異端の宣告を
受けた四・五世紀のイギリスの修道士ペラギウス
に始めて、アウグスティヌスに対してペラギウス
は「人間がその行為によって魂の救済を手に入れ
ることができる^⑪」という考えである。「彼は倫理
的行動を強調し、人間の究極的な永劫の罰を否認
する。彼の見解によれば、アダムの原因は、魂の
死をもたらすものではない。彼の悪い例示は、
たゞ人間性に対する危険をあらわすものでしか
ない。この教義の広がり阻止するため、聖アウグ
スティヌスは、恩寵に助けを求めて走るのである
⑫」。十一世紀後にアウグスティノ修道会士ルター
が現われて、アウグスティヌスは大きな成功をお
さめ、「この観念は必然的に、各人間の運命は神に
よって予定されているという思想に導かれなけれ
ばならない。カルヴァンは、そこから後に、予定
説の教義を編むのである^⑬」。「この非常にラディ
カルな説はルネサンスのフマニズムの思考の中
に決定的な反対者を見出す^⑭」ことになる。しか
し、メシェランの共時的把握と異なって、フマニ
ズムスがプロテスタンティズム、とくにピューリ
タニズムによって通時的に克服されていくという
考え方も、かなり強いことも事実である。^⑮

カルヴァニズムは、アムステルダムで一五七八
年に目立たない形で現われたが、アントウェル
ペン陥落後、逃亡者のアムステルダムへの流入後、
状況が大きく変る。ネーデルランド南部からの新
到着者たちは、来るべき勝利のための固い意志を
持ち込んだ。彼らにとっては、一方にカトリック
派とスペイン、他方にカルヴァン派と共和国と自
由が、拮抗し合っていた。多くの者の間に信仰的
モチーヴとナショナルなモチーヴが混じっていた。
最初にかなり小さかったカルヴァン派は、急速
に増大した。一五八三年にカルヴァニズムは支
配的な宗派となった^⑯。（大木英夫の「ピューリ
タン」――中央新書――は、英国における「アン
グリカニズムとピューリタニズムの間の微妙なし
かし重大な差について述べて」、カルヴィニスト
である「カートライトは聖書を教会と国家を含めた

社会全体改革にまで適用した」。

神学的にカル
ヴィニストであるウィトギフトを代表者にもつ
「アングリカンは聖書をそこまで適用しない。む
しろ英国の伝統」に従う。「この英国史の伝統とい
うのは、ローマ教皇の支配が英国の上に及ばな
かった時代の伝統ということで、むかし英国の教
会は国王の権威の下に服していた。それが英国宗
教改革の正統性の根拠となるわけである。だから
英国宗教改革は、聖書への復帰でなく、英国の過
去への復帰であった。そこにナショナリズムとの
結合が可能となるわけである」と。（P.44－P.45）。
また、ピューリタンは、ハンプトン・コート会談
に失敗したが「一方で説教運動を通じて人民との
結びつきを深めつゝ、他方では議会、コモン・ロー
といった英国の重要な制度や伝統と結びつきが可
能となった」（P.74－P.75）。コモン・ローなどは
ネーデルランドには欠けている。またネーデルラ
ンドのアルミニウス派との比較で、広島大学山田
園子教授の労作「イギリス革命とアルミニウス主
義」（聖学院大学出版会 1997）におけるカルヴィ
ニズムの否定とジョン・ロックへの連繫、予定説
と自由意志説との類似性の強調の始まりなど示唆
するところが多い。さらに、ミルトンとアルミニ
ウス主義については、新井明「ミルトン」清水書
院 1997 189 ページ以下参照）カルヴァニズ
ムは唯一の正当な宗派と見なされ、教会の政治へ
の進出の危険は、十六世紀末以来、顕著となった。
それでフマニストのコールンヘルト（Dirck
Volckertsen Coornhert）は、牧師たちにその召命
の限界を超えないように、市民政府の問題に容喙
しないように、頼んでいる^⑰。カルヴァニズム内
部での対立も激化する。レイデン大学の神学教授
アルミニウス（一五六〇－一六〇九）は、コール
ンヘルトの文書が「厳格なカルヴァン主義にとり
深刻な危険を示すコールンヘルトの信奉者たちと
の軋轢を好まな」かったが^⑱、同僚にあたる同じ
レイデン大学教授のホマルス（Franciscus
Gomarus 一五六三－一六四一）は厳格な予定説
をとなえてアルミニウスを攻撃した。「アルミニ
ウスの解釈では、予定は何ら仮借なきものを有し
ているわけではない。アルミニウスはその厳格さを
緩和し、人間に魂の救済の途上における
行為の余地を委ねている^⑲」。パレットの訳者奥山
秀美（女子美術大学）教授の訳注では、アルミニ

ウス派が建議派、厳格なカルヴァン派が反建議派と呼ばれるようになった経緯を述べ、「州分権主義の立場をとり、宗教的寛容を標榜する、ホラント州議会のレヘントたちを中心とする上層市民は前者を支持し、厳格なカルヴィズムを統一的宗教たらしめようとする説教師たちと、彼らに指導される中、小市民層、一般民衆は後者を支持した。当時、ホラント、ユトレヒト、オーフェルエイセルの各州以外の他の州ではホルマス派が多く、連邦議会……は宗教会議の開催を決議した。ホラント州の内部でもホルマス派が優勢であったが、オルデンバルネフェルトを^{レモストラント}始め州議会はアルミニウス派で占められ、また建議派（アルミニウス派）が敗北することはカルヴァニズムが国教となることを意味する形勢となっていたので、ホラント州議会は（1）宗教会議の開催を認めぬこと。（2）ホラント州の費用で賄われている軍隊は州政府の命令に服すべきこと……を決議した。一方、アムステルダムの商人たちは、オルデンバルネフェルトの和平政策がスペインとの戦争による彼らの利益を阻害するものとして反オルデンバルネフェルトの立場をとり、また軍の總司令官である總督オラニエ公マウリッツ（Jan Mauritz）（一五六七―一六二五、オラニエ公ウィレムの第二子）は、オラニエ家の一員として個人的野心と合わせて……遂に、一六一八年、……連邦議会の支持をとりつけてクーデターを起し、オルデンバルネフェルト以下四人の指導者（グロチュウス―彼もアルミニウス派である（引用者）―もその中に含まれていた）を捕え、オルデンバルネフェルトは一六一九年……ハーグで斬首され、アルミニウス派の説教師たちは国外に追放され……正統のカルヴァニズムの教理が定式化された^{④⑤}。（アルミニウス派は潜行を余儀なくされるが、三〇年代にはまたも大きな力^{レモストラント}を得てくる。一六三一年にアムステルダムは建議派に反対する布告を更新しないことを公表している^⑥。この時期のリベラルな企業家たちは西印度会社の独占を支持しない傾向にある^⑦。）

いわば州の元首にあたるオルデンバルネフェルトは、法孥者かつ神孥者として国際的令名を博しているグロチュウスに委嘱して、アムステルダム市の市参事会と宗教問題をめぐり説得しようとする。しかしこれは水泡に帰した^⑧。市議会の大多

数はオルデンバルネフェルトの宗教問題に関する決断を拒否した^⑨。それは――とアンリ・メシュロンは言う――彼の和平に対する意思の評判を一層悪くするための口実である、と。アムステルダムなしには全て事は進捗しないのが真相である。歴史家ピーター・ガイルとともにいかにこの提案が拒否されたか質問したいとメシュロンは言う^⑩。（注で P.Geyl の ” Historische appreciaties van het zeventiende eeuwse hollandsche regenten leven. “ Meded. van Koninklijke Vlaamse Academie. Klasse der Letteren. 15 - 16. の興味のある研究も見よ――とある）。それはそうでもその戦列のなかにその少し前まで市長コルネリス・ピーテルゾーン・ホーフト（Cornelis Pieterszoon Hooft）のようなリベランがいた。それで彼はその職を解任された。この時期の最強の人物は、厳格なカルヴィニストでオルデンバルネフェルトの断固たる反対者である権柄づくで、野心家である市長レイニール・パウ（Reinier Pauw――一五六四―一六三八――）であった。しかし、いかなる理由から、アムステルダムの政府は厳格な牧師たちの強烈な熱意^{アイファー}を支持したのか？なぜこの都市は、反建議派の砦となったのか？住民の多数は決して厳格なカルヴァン派ではなかったし、グロチュウスの用件に対する市長の拒絶的態度は、政治家たちが住民のもしかすると有りうるかも知れぬ反乱に対して憂慮している論拠では説明され得ない。あるいは、その態度を神の恩寵かてらしたのか？

この都市は、スペインとの休戦に反対であるから、オルデンバルネフェルトに対して支拒否したのである。都市のリーダーたちは、つまり和平締結の場合には、相当な利得の損失を恐れていた。つまり、海賊行為が終ってしまう――まさにこの行為は、船主たちに異常な利得をもたらしたからである――、とりわけしかし、すぐれて神の栄光と祖国愛と統合されているアメリカの夢が終ってしまうことになる。スペイン・カトリシズムに対する戦いの休止である休戦協定は、実に、スペイン王国からその富の泉を奪い取る西印度会社の形成を阻止するものであった。正しい信仰の闘士は利潤の騎士でもある。その闘士が予定説を信奉する強烈な熱意と、砂糖・金・銀・宝石^{キン}を積んだ船舶の帰還にかけた希望とは、完全に一致する。既にずっと前から、インドの財宝の輝きは商人たち

ベデーレンの欲望を呼び起していた。彼らは、和平を目指す、慎重に考えをすゝめるオルデンバルネフェルトの政策に失望していた^⑧。(十六世紀後半の南ネーデルラントのアントウェルペンから移住して来た、予定説・利潤間の陰謀を証すウィルヘルム・ユセリンクスのアメリカでの活動と「理想家」肌の記述はともかくとして――引用者。たとえばメシュロンは、ユセリンクスは「アメリカにおけるスペイン権力破滅の計画を練るためにその人生を送ってきたが、その熱情は無条件に、商品世界におけるうま味にあるのではない」^⑨と。この点を取り扱ったものに、大塚久雄「十七世紀における東印度貿易と新大陸貿易との対立」「ウィルヘルム・ユセリンクスの眼に映じたる東印度貿易」があるが、商品の規定にしても――「東印度より和蘭へ輸入されたものは、何ら資本主義的商品ならぬ、東洋で『非資本主義的』に生産された奢侈品である」という叙述、「東印度への輸出品の大宗は何ら本国で『資本主義的に生産された商品』でなく、『亜米利加にて奴隷制的に生産された銀』であった」という叙述から、文献渉獵にもかゝらず問題がはなはだ多い。) アムステルダムの商人たちの間で、ユセリンクスは宣伝する。そのプロジェクトの支持を、とにもかくにも、アムステルダムは決定する。このプランの非常に熱心な信奉者の間に、前述の市長レイニール・パウがいる。誰もオルデンバルネフェルトの和平に耳を貸そうとしなかった。總督モーリッツ・フォン・ナッサウは、レイニール・パウの支援の下に、一六一七年にオルデンバルネフェルト時代の終焉を計画し、オルデンバルネフェルトは、一六一八年に斬首される^⑩。

〔アムステルダムの「陰謀」〕

バレットは言う。「私としては、利己的なアムステルダムの陰謀の最も顕著な二、三だけを大略の輪廓において記すだけで充分であろう。Ex uno disce omnes (これら二、三のことから爾余の全体を判断せよ。)^⑪」と。そして、六の例を挙げている。そのうち、十六世紀後半の二例は略す。十七世紀の①「一六〇七年にオルデンバルネフェルトはスペインと和平会談を開始し、その結果、二年後に休戦協定が結ばれた。平和に反対したのは誰だったのであろうか。アムステルダムの商人たちであった。なぜなら、スペインは協定の条項と

して、オランダ人が海賊行為を止めるべきことを要求していたからである。……」。^②「一六三三年に、悪名高きピッケル家の一党が災厄多きその陰謀を開始した。四人の兄弟はアムステルダム全体を支配した。彼らは敵と取引し、敵に武器、弾薬、船舶、一言にして言えば、敵がオランダと戦うために必要な一切のものを供給した(前述の市長パウも敵と貿易している――引用者)^③。アムステルダムの市長を務めたピッケル一家は、多年にわたって、彼らの仲間の市民に対する紳士面をした殺戮者であった」。^④「一六三九年に、ホラントおよびゼーラントの總督フレデリック・ヘンドリックは、今や、スペインの支配下にある南部ネーデルラントを征服すべき絶好の時であると考えた。この方向への第一歩は当然アントウェルペンの攻略であった。もちろん、アムステルダムは、以前にモーリッツ公のそれと同じ計画に反対したように、猛烈に反対した。アントウェルペンの港がアムステルダムの港より優れていることは否定し得ないことであり、またそれゆえに、アントウェルペン攻略の結果、世界貿易の中心がアントウェルペンに戻ることになるかも知れなかった。……」^⑤等。この「5 政治」の末尾に彼は書いている。「アムステルダムは自己の特定の利害にのみ意を用いたのである^⑥」。

〔アムステルダム取引所・有価証券〕

この時期にアムステルダムは、世界で最初の有価証券取引所として登場することになる。その取引所については、次のように叙述されている。Diese drei Boerse (1409 die erste Boerse Europas - Bruegge, Antwerpen 1460, Lyon 1462) duerften die einzigen sein, die man als mittelalterliche Boerseplaetze aussprechen kann. Im 16.Jh. gewann Amsterdam zunehmende Bedeutung und entwickelte sich zur ersten Boerse, die man im engeren Sinne als → Effektenboerse bezeichnen kann. Dort kamen erstmals festverzinsliche Wertpapiere, etwa die sog. Rentenmeisterbriefe, aber auch andere Anleihen bzw Obligation mit ueberregionaler Reichweite an den Markt. Durch die Emission der Aktien der Niederlaendischen Ostindischen Kompanie ab 1602 und ihrer Einfuehrung an der

Amsterdamer Boerse kam das Geschaef in Dividenden - bzw. Beteiligungspapieren hinzu, wodurch Amsterdam zum fuehrenden Boersenort der damaligen Welt avanciert. Der Aufschwung des Indienhandels im 17.Jh. steigerte die Umsaetze an den bestehenden Boersen der wesentlich.

In London wurde 1554 mit der Royal Exchange (die London Stock Exchange wurde erst 1773 errichtet) wiederum eine 《Weltboerse》 ins Leben gerufen, die bis zur Gegenwart von eminenter Bedeutung blieb.^⑤

また有価証券については、次のような記述がある。[Effekten] Die Begriffe Effekten und Wertpapier sollten definitorisch streng unterschieden sein, ……………

Da die Fungibilitaet im Mittelalter nur bedingt gegeben war, ist es schwer, den Ursprung der Effekten genau zu bestimmen. Die Versachlichung und Mobilisierung von Forderungsrecht fand auf breiter Basis erst im 17. und 18.Jh. statt. Dieser Prozeß, der keineswegs revolutionaer vor sich ging, kam wesentlich unter dem Druck wachsenden Finanzbedarfs und verstaerkter Verschuldung der oeffentlichen Hand zustande. Die Urspruenge des Effektenwesens sind deswegen dort zu suchen, wo erstmals solcher Finanzbedarf in ungewoehnlich umfangreicher auftrat. Dies war zunaechst im Bergbau der Fall (Kuxe), dann mit der ueberseeischen Expansion im Kolonialgeschaef bzw. im Schffbau (Namenaktien), sodann im Rahmen der Staatsverschuldung (festverzinsliche Anleihen, Obligationen, Rentmeisterbriefe etc.) und schließlich bei der Durchsetzung der industriellen Revolution mit besonderen Schwerpunkten im Eisenbahnbau (Inhaberaktien) ……とイエーナ大卒のR・ワルター教授は言う^⑥。

[ネーデルラントの世界侵略]

バレットのV十七世紀のオランダの1経済の冒頭で、「この章が十七世紀の経済から始められたのは……たまたま生活そのものが他の現象よりも

経済という現象の中にいっそう顯著に現われてくるということである⁵⁵⁾。○として、一五八五年のスペイン軍によるアントウェルペン攻略後にオランダの繁栄が始まったと敘述する⁵⁶⁾。○オランダは外国の産業家たちの流入によって、(前述の——引用者) バーシュが《産業革命》とまで誇張して述べたほどの利益を受けた。⁵⁷⁾ 綿子、ピロード、つづれ織、室内裝飾品の材料、家具、金象嵌の皮革製品等の製作、また、オランダではそれまで知られていなかったダイヤモンドの切削研磨、といった産業がまもなく栄え始めた⁵⁷⁾。○もちろんその基礎にハンザ独占を打ち破ったバルチック海での「死活的な」^{57b)} 〆〆デルランド商業の小麦貿易を独占する仲継貿易の展開がある。スペイン・フェリペ二世のオランダ船舶に対するスペイン・ポルトガル諸港閉鎖によって、オランダは「その鯨漁業に必要な塩をもはやポルトガルで買うことができなくなったため、塩の豊富にあるヴェルデ岬諸島に航海した。そこからギニアまでは指呼の間であった。オランダ船は一五九三年に初めてギニアに姿を現わした。このギニアへの航行がアムステルダムへの金貿易と、西インド諸島への黒人奴隷貿易の開始であった。一五九四年に最初のオランダ人がブラジルに達し、一五九五年には彼らは南アメリカの北岸で塩を発見した。

その間にも、インド諸国への航海のためにあらゆる準備がなされた。……………一六〇二年に有名な東インド会社が設立され、……………いく年も経ずしてスペイン人やポルトガル人は諸所の植民地から追放され、それから、オランダ人が《黄金時代》と呼ぶ時期が始まったが、それにいっそう相応しい名称は《金の時代》であった。なぜなら、それは世界が目撃した最も野蛮な植民地略奪の開始であったからである^⑧」と。

一六〇五年

アムボン、香料諸島モルッカ征服

一六一九年

イギリスを押えて、ジャカルタを破壊して、バタビアを築く

一六二一年

西インド会社設立(密貿易・私拿捕(海賊行為)を主として、東部アメリカ、西部アフリカの貿易独占)

一六二四年

台湾に在外商館・ブラジルに居留地、西インド会社

おこう。

シェラレオネに植民

一六二六年

ハドソン河沿岸に植民（北アメリカにおけるオランダの最初の植民）し、ノイ・アムステルダム（現ニューヨーク）を築く

一六三四年

キュラソー征服

一六四一年

サン・パオロ・デ・ロアンダ、サントーメおよび黄金海岸〔現在のガーナ〕の諸島に植民

一六四二年

トバゴを征服

一六四五年

セント・ヘレナ占領

一六五二年

ケープタウン占領

一六五八年

セイロン占領

一六六二年

インド諸国のすべてがオランダの手中にあり（ポルトガルより奪う）

一六六七年

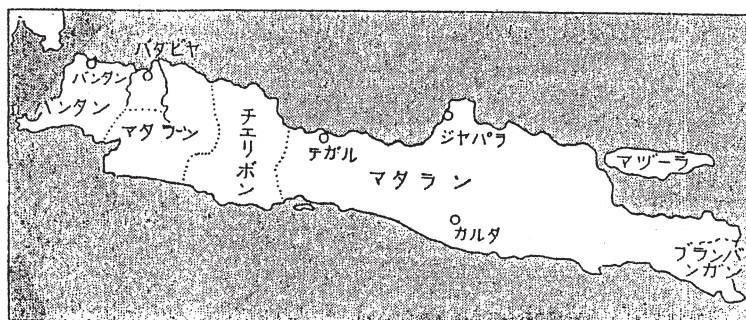
スリナム、エスキェボおよびセント・ユースタッシュを征服^⑨

以上が十七世紀のオランダ資本の主要な略奪的な展開状況であった。

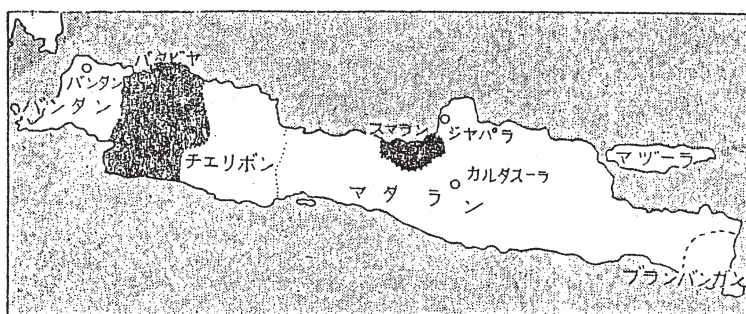
「東インド会社は、資本644万フローリン中、アムステルダム商業会議所 (Kamer) が八割……を所有した株式会社の先駆であった。同社は当初征服の外観をさけて……『謙譲と巧妙』をもって商務と実務に成功した。その盛時には、ジャワ、アンボイナ、バンダ、マラッカ、モルッカ、セイロン、マカッサル、ケイプの八植民地を領し、……所有軍艦41、船舶3000、海員100000名に達した。その反面、狡猾気敏、抜目なく独占政策をもちいた」(柳生前掲書 150ページ)。

今こゝでまた東インドの時代的変貌を図示して

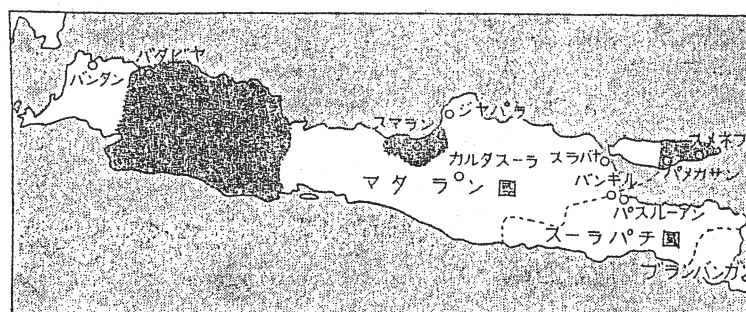
〔第一図〕④



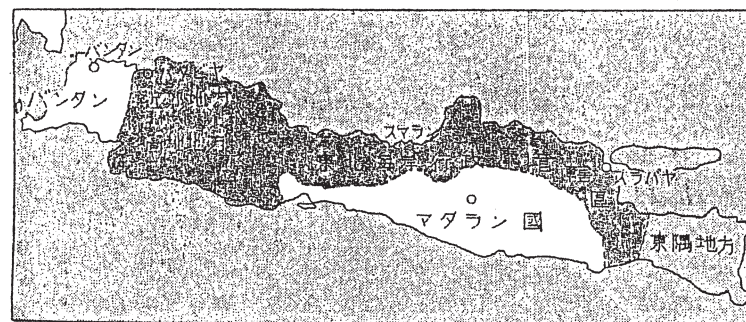
1619年ジャバに於ける會社の領域



1680年ジャバに於ける會社の領域

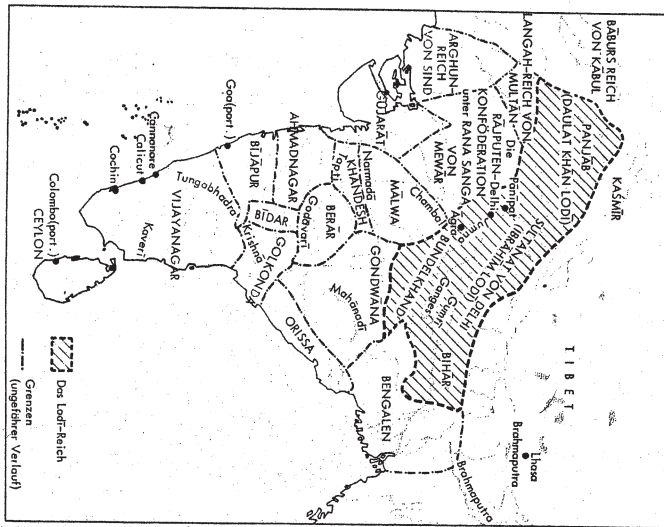


1705年ジャバに於ける會社の領域

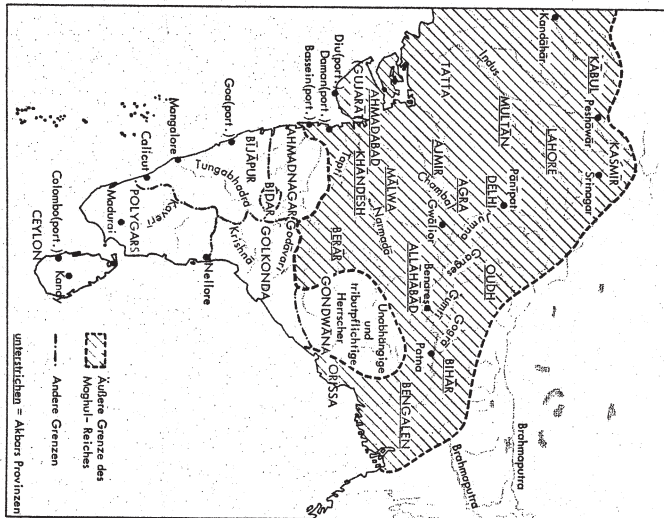


1743年に於ける會社の領域（東隅地方は1772年歸屬）

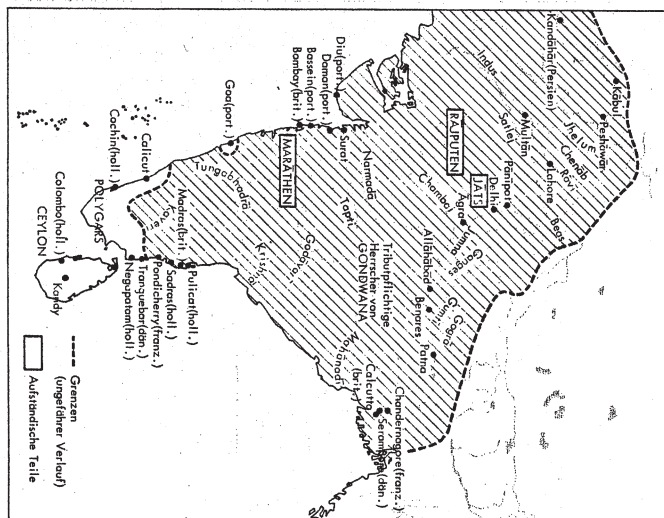
A. J. エイクマン, F. W. スターペル共著、村上貞次郎・原徹郎共訳
「蘭領印度史」東亜研究所 昭和17年 p.61, p.96, p.104, p.119より



Indien 1525



Das Moghul-Reich beim Tod Akbars



Das Moghul-Reich am Ende des

[ネーデルラントの海運]

バレットは、「このようにわずかの細部を並べても、小国オランダの世界的な力についての観念を得ることはできない^㉔」として、バルト海貿易を例示する。「《Oostersche Negotie》(バルト海貿易)は、一五七八——一六七五年にスンド海峡[スウェーデン南西部とデンマークのシェラン島との間にあって、カテガト海とバルト海をつなぐ]を通過したオランダ船の数が、他のすべての国の船を全部合わせた数よりもはるかに多かったほど発展していた^㉕」。その中核は穀物貿易であって、前記のバーシュは「十五世紀以来、アムステ

ルダム繁栄の大部分は、この穀物貿易による。穀物の供給なしにネーデルラントは中世においても存立し得なかった。ネーデルラント沿岸諸都市の課題は、常にバルト海の穀物を貯蔵することであつた^㉖」と記述している。また、そのトン数の展開を、一四七〇年——三〇〇〇ラスト、一五七〇年——一六〇〇ラスト、一六七〇——二八四〇〇ラストと記している^㉗(なお、ラストは、ドイツ、オランダなどで使われた重量の単位で、ドイツでは2t、または3tにあたる)。今こゝで西に向うズント海峡通過のネーデルランド船の穀物量を図示しておこう^㉘。

In Niederlaendischen Schiffen passierte Getreide den Sund westwaerts (in Lasten).					
Jahr	Roggen	Weizen	Hafer	Gerste	insgesamt
1591	26995	2258	2821	625	32699
1592	26880	2235	2168	139	31422
1593	39527	2411	3258	574	45770
1594	27163	3800	2475	580	34018
1595	25878	3787	2393	973	33031
1596	28157	2179	2241	1122	33699
1597	38874	4060	2533	408	45875
1598	43748	9855	1515	2	55120
1599	25547	3611	1103	191	30452
1600	30774	2768	653	164	34359
1601	33439	2191	632	12	36274
1602	22596	3249	35	15	25895
1603	31887	3167	333	-	35387
1604	24067	1268	305	-	25640
1605	28721	700	1161	82	30664
1606	29524	2087	1287	68	32966
1607	44276	8120	3155	41	55592
1608	72094	5602	2146	558	80400
1609	34689	5036	1844	100	41669
1610	27047	3088	3461	282	33878
1611	26313	3749	3271	73	33406
1612	38781	3929	3924	948	47582
1613	27799	2019	1749	416	31983
1614	55409	3897	1955	226	61487
1615	33592	2244	3236	772	39844
1616	28300	2098	1729	244	32371
1617	31901	3662	1161	247	36971
1618	83606	13164	6053	4247	107070
1619	81132	12636	4603	1112	99483
1620	66043	15613	7381	1308	90345
1621	68593	11626	5414	136	85769
1622	51119	5787	5253	369	62528
1623	33679	5165	4247	190	43281
1624	20210	3132	1500	384	25226
1625	20318	4245	2060	580	27203
1626	36082	4480	2964	1142	44668
1627	19257	3890	3436	403	26987
1628	12389	1701	3096	48	17234
1629	5643	829	2513	-	8985
1630	6929	942	1013	57	8941
1631	23874	5608	1828	87	31797
1633	36477	7461	3161	1404	48503
1635	32840	8046	2484	575	43945
1636	42245	9971	7716	829	60761
1637	20930	7064	11975	1052	41021
1638	28288	8165	2568	977	39998
1639	36153	12123	7237	357	55870
1640	34516	13430	7387	73	55406
1641	45533	14513	10533	384	70963
1642	35374	15084	11030	327	61815
1643	47173	20410	15348	215	83146
1644	52915	16384	11211	242	80752
1645	515	88	329	-	932
1646	31323	11726	8488	241	51778
1647	36696	13654	6961	142	57553
1648	42416	16681	6414	807	66318
1649	76592	20256	8721	2259	107828
1650-52	-	-	-	-	-
1653	15179	5423	3400	440	24442
1654	34294	11144	6063	326	51827
1655	45797	13480	2999	123	62399
1656	27181	8872	1741	280	38074
1657	15911	4444	780	55	21190

「ウォルター・ローリーによれば、一六〇四年と一六一六年の間には、三〇〇〇のオランダ商船に対してわずか一〇〇〇のイギリス船がエルピング [エルブロンク]、ケーニヒスベルク [現在のグダニスク] への貿易に従事していたにすぎない。同じローリーの資料は、二〇〇〇のオランダ船でもフランス、スペイン、ポルトガルに商品を運ぶにはほとんど充分ではなかったことを伝えている。《Straetvaert》(地中海貿易) のためには約四〇〇の船が必要であった。十七世紀の中頃には、世界の海を航行する全ての国々の船舶の総数は約二万五〇〇〇であったが、そのうちの約一万五〇〇〇がオランダ船であった^{⑧)}。

[世界経済における貴金属流出入]

①このオランダ等の貿易を、いま貴金属の流れから、キール大卒のミヒアエル・ノルト (Michael North) 教授は考察している。(パーシェルが既に言っているように「金銀は常に東に流れた」^{⑨)}

Am Ende des Mittelalters bilden sich dann zwei Haupteinzugsgebiete des Edelmetalltransfers heraus, die auch noch in der Fruehen Neuzeit Bestand haben sollten. Zum einen stroemte Edelmetall in den Ostseeraum und auf den russischen Markt. Hier waren die Getreide- und Holzimporte aus Preu ß en und Polen und die Pelze- und Wachssendungen aus Livland und Ru ß -land wertvoller als die Salz-, Fisch- und Fertigwarenlieferung aus dem Westen. Zum anderen schickte Venedig jaehrlich rund 300000 Dukaten zum traditionellen Wareneinkauf in den Nahen Osten. Die Edelmetallsendungen reduzierten die europaeischen Edelmetallvorräte und verschaeften die allgemeine Edelmetallknappheit. Neue Dimensionen erreichten die Edelemetallstroeme in der Fruehen Neuzeit durch die Erschließung neuer Silbervorkommen in Spanisch Amerika und die Expansion des europaeischen Handels nach Uebersee. Ende des 16.Jhs. flossen jaehrlich 260 Tonnen Edelmetall (ueberwiegend Silber) nach Europa und uebertrafen damit deutlich die Ausfuehren in den Osten (vgl. Tabelle) . Ein Teil des amerikanischen Silbers floß ueber

Spanien – sowohl durch den Handel als auch politisch-militaerische Geldsendungen – in die europaeischen Muenzstaetten. Dabei berechneten Handelshaeuser wie die Fugger aufgrund der Praegekosten und des Silberpreises ganz genau, auf welchem Edelmetallmarkt (Genua, Florenz, Mailand, Venedig, Rom, Antwerpen, Nuernberg) das Silber mit den groe ß ten Gewinn in Verkehr gebracht werden konnte.

Europaeische Edelmetalleinfuehren und ausfuehren 1600-1780 (in Tonnen Pro Jahr)

	1600	1650	1700	1750	1780
Einfuehren nach Spanien/Portugal	260	221	299	559	533
Ausfuehren nach					
Ostseeraum	52	65	52	52	104
Naher Osten	26	52	52	65	65
Ostasien	36.4	33.8	117	200.2	213.2
Insgesamt	114.4	150.8	221	317.2	382.2

Die Haelfte bis zwei Drittel der Edelmetalleinfuehren aus der Neuen Welt flossen wieder nach Osten ab, wobei neben dem Ostseeraum und dem Nahen Osten Ostasien zunehmend an Bedeutung gewarnn.^{⑩)}

②また、マルクスの「グルントリッセ」には、次のように述べられている。

Im Markantilsystem gilt das Gold und Silber daher als Ma ß der Markt der verschiedenen Gemeinwesen. " Sobald die precious metals objets of commerce werden, an universal equivalent for everything, werden sie auch mesure of power between nations. Daher das Merkantilsystem. "(Steuert) ……So die Zirkulation des amerikanischen Silbers vom Westen nach Osten; das metallne Band zwischen Amerika und Europa auf der einen, mit Asien auf der anderen Seite seit Beginn der modernen Epoche.^{⑪)}

また同書のスペインに関する二、三箇所を示せ

ば――

Das Geld als individualisierter Tauschwert und damit inkarnierter Reichtum ist gesucht worden in der Alimie; es fungiert in dieser Bestimmung im Monetär (Merkantil) system. Die Vorepoche der Entwicklung der modernen industriellen Gesellschaft wird eröffnet mit der allgemeinen Geldgier, sowohl der Individuen, als der Staaten. Die wirkliche Entwicklung der Reichtumsquellen geht gleichsam hinter ihrem Ruecken vor, als Mittel, um des Repraesentanten des Reichtums habhaft zu werden. Wo es nicht aus der Zirkulation hervorgeht - - wie in Spanien - -, sondern leibhaft gefunden wird, verarmt die Nation, waehrend die Nationen, die arbeiten muessen, um es den Spaniern abzunehmen, die Quellen des Reichtums entwickeln und sich wirklich bereichern. Das Auffinden, Entdecken von Gold in neuen Weltteilen, Laendern, spielte daher so gro ß e Rolle in der Geschichte der Revalution, weil hier Kolonisation improvisiert wird, treibhausmae ß ig vor sich geht. Das Jagd nach Gold in allen Laendern fuehrt zu ihrer Entdeckung; zu einer Staatenbildung;.....

” Haette Spanien nie die Minen von Mexiko und Peru besessen, so haette es nie bedurft des Korns von Polen. “ (Ravenstone) ⑦

③尚前記のメシエロンは、アムステルダムを中心とする手形の展開を数ページにわたって記述して、次のように書く。

Den Worten Van Dillens zufolge ist Amsterdam das Zentrum des internationalen Handels mit Edelmetallen, die durch die wirtschaftliche Macht der Stadt wie durch eine Naturkraft angezogen werden. Jaehrlich verlae ß t eine Silberflotte mit gro ß em Geleitschuz den Hafen von Cádiz in Richtung Amstel und entlaedt eine solche Menge Metall, da ß die Boerse und die ganze Stadt in Erregung versetzt werden. Gegen 1650 landeten etwa 50 Prozent der Produktion aus den amerikanischen Silberminen in Amsterdam. Dennoch gohoert nur ein Teil der

wertvollen Ladung den hollaendischen Kanfleuten. Der Rest wird von den Spaniern ueber nordfranzoesische oder suedniederlaendische Kaufleute zum eigenen Gebrauch nach Amsterdam gebracht. Diese Haendler „ lie ß en das Silber ueber Amsterdam transportieren und benuetzten da fuer eine haellaendische Silberflotte, im Vertrauen auf die Sicherheit und die guenstigen Preise der Ladung. “ In Amsterdam werden das Gold- und Silberbarren entweder auf die Bank gebracht oder aber von den verschiedenen Muenzpressen verarbeitet, die einzig fuer den Au ß enhandel spezielle Silberstuecke praegen. Dieses Geld kann von den Haendlern frei exportiert werden, die je nach ihren Beduerfnissen und fuer jedes Land, mit dem sie Handel treiben wollen, eigenes Muenzgeld kaufen. Fuer die Levante und Kleinasien braucht man leeuwendaalders; die rijksdaalders sind hingegen dem Handel mit dem Baltikum und Polen vorbehalten; Ru ß land wiederum verlangt Golddukat. Die Ausfuhr von hollaendischen Muenzen aus Edelmetall zieht sich durch das gesamte 17. Jahrhundert. Sie sind wegen ihres Feingehalts und des angesehenen Herkunftslandes so gefragt, da ß bis gegen Ende des 18. Jahrhunderts, berichtet Van Dillen weiter, polnische Bauern fuer ihr Getreide keine andere Waehrung annehmen wollen. Des Vertrauen der asiatischen Potentaten in das Geld aus Amsterdam ist so gro ß , da ß die englische Ostindische Kompanie ueber ein Jahrhundert lang gezwungen ist, in Amsterdam Dukaten zu erwerben, um ueberhaupt in dierer Region Handel treiben zu koennen. Der Handel mit Golddukat erreicht jaehrlich eine Summe ven 7 bis 8 Millionen Gulden.

Der freie Wechselverkehr, den die Bank von Amsterdam sichert, sowie die Freiheit, Gold und Silbermuenzen und selbst Silberbarren auszufuehren――damals fuer Europa einmalige Vorgaenge――, begruenden einen Markt fuer Edelmatalle, derdem Handel mit Wechseln in nichts nachsteht.⑧

④またオックスフォード大学のJ・H・エリオット教授はこの貴金属流（出）入をめぐって次のように考察している。

Gold was power. This had always been the Castilian attitude to wealth, and the discovery of gold in the Indies seemed to fulfil an old Castilian dream. But the finding of gold, and, still more, of silver, also fulfilled a genuine European need. Medieval Europe did not exist in a monetary vacuum. On the contrary, its stocks of gold and silver rose and fell in response to global movements over which it exercised little control. When the Moslem world was minting gold coins, as it was between AD.1000 and the mid-thirteenth century, Christendom was minting silver; and when, in the later Middle Ages, the silver famine of the Moslem world was eased, and its silver currencies began to replace gold, Europe started minting large numbers of gold coins, while its silver reserves ran increasingly low. In this intricate counterpoint of Europe and Asia, Europe seems to have been relatively well endowed with gold in the late fifteenth century, but the Mediterranean regions in particular were acutely short of silver.

The influx of a stream of American bullion into Europe needs to be set into this global context—a context in which different rates between gold and silver in Europe and Asia caused large-scale flows of both metals in opposite directions. Between 1500 and 1650 something like 181 tons of gold and 16,000 tons silver reached Europe officially from America, and further large quantities must have arrived by contraband. Attempts to relate these figures to those for the existing stocks of precious metals in Europe have not proved very successful; but one could reasonably expect that the influx of such a large quantity of precious metals would have considerable consequences, not only for Europe's monetary system, but also for the

character of its economic relationship with the outer world.

The first bullion imports from America were gold imports, and it was only in the decade 1531-40 that silver secured its dramatic lead. In the opening decades of the sixteenth century, therefore, more gold was coming to a Europe already relatively well supplied with gold; and if there was any casualty, it was the gold of the Sahara, which had helped to sustain the economic life of Europe in the later Middle Age. It was only in the second half of the sixteenth century that American silver production, outpacing that of the Tyrolese mines, began to satisfy a Europe which had been silverhungry for so long. One consequence of the new availability of silver was to push up the price of gold relative to that of silver—by the early seventeenth century the ratio of gold to silver exceeded one to twelve. A further consequence was to enable Europeans to acquire larger quantities of those Far Eastern luxuries for which Asia insisted on silver in exchange. Unfortunately, it is impossible to know with any certainty what proportion of Europe's American silver flowed out again to the East during the great silver-age of the sixteenth century. In the seventeenth century there came a moment when Asia was glutted with silver from the American mines. But, at least until that moment, the windfall of American silver enabled Europe to buy oriental goods which it could not otherwise have afforded, to the consequent benefit of a European-elite which hankered after exotic luxuries, and of those members of the merchant community who were able to supply them.⑤

The fate of American silver once it reached Seville remains almost as much of a mystery now as when Hamilton wrote, but it is precisely on this question of its destination that his argument finally turns. How much of the

silver reaching Seville really entered the Spanish monetary system?.....

An official estimate of 1594 indicates that, out of an average annual remittance from the Indies of some ten million ducats, six million were leaving Spain each year—three million to meet the foreign expenses of the Crown, and three million to the account of private individuals. Instead of ten million ducats being injected into the Spanish monetary system, therefore, the figure is only four millions, at the very most.^③

It would seem legitimate, therefore, to entertain some doubts about the role of American silver as the prime source of dynamic change in sixteenth-century Europe. But may there not be a better candidate than American silver—the American trade itself? Europe urgently needed the silver of the Indies, partly to acquire oriental products, and partly to satisfy the needs of its own increased economic activity. But some of this increase in economic activity was itself the direct result of the opening up of a new and expanding American market, which came to expect a growing quantity, and a growing variety, of European commodities. America's needs therefore stimulated the growth of European industries, from shipbuilding to textiles, and the economic growth of sixteenth-century Europe became closely tied to the expansion of the Spanish-Atlantic trade.

This is the central thesis propounded by M. and Mme. Chaunu, who have launched upon the historical ocean a mighty flotilla of volumes, heavily freighted with hypothesis, statistics and facts. They have provided us with a monumental list of the names and tonnage of the ships which made the Atlantic crossing between Sevilla and the Indies over a century and a half; they have established in the most meticulous detail the actual mechanism of Seville's transatlantic trade; and they have

worked out a pattern for this trade which suggests a close correlation with the movement of prices in Amsterdam, and hence with the wider movements of the European economy.

The general nature of this pattern is by now well known. The years 1504-50 are depicted as the first great age of European expansion—the age of the moving frontier in America; of conquest, colonization and the first influx of bullion which stimulates investment at home. There follows a twelve-year hiatus, when the conquest are complete and the systematic exploitation of the resources of the Indies has yet to get under way. But after 1562, the colonial demand for European goods is intensified; there is a rapid increase in the output of silver which will pay for these goods; and the Seville trade expands. As more treasure flows into Seville, more becomes available both for the Spanish Crown and for European entrepreneurs, but at the same time more of it has to be invested in the ships and the cargoes of the expanding Atlantic trade. It appears that around 1570, for instance, about half the sum which arrived from the Indies in bullion each year was being employed to freight the fleet for their next transatlantic voyage. Finally, at the beginning of the seventeenth century, saturation-point is reached. The colonial market for European goods has reached the limits of its expansion; and from about 1622, with the American demand falling off, silver reaches Seville in diminishing quantities, Seville's Atlantic trade slumps decisively both in value and volume, and Europe enters its depression of the mid-seventeenth century.

There is an elegance and a simplicity about this explanation of European economic fluctuations in terms of the trade of Seville which makes the Chaunu thesis immediately attractive.....^④

[ネーデルラントの公債など]

オランダ商人の膨大な富については、ヨーロッパの主権者たちによってオランダで契約された借款表をまとめてみればわかる。

①既に一六一六年にブランデンブルクは借款を受けていると、バーシュは述べている^⑥が、バレットによれば、「クレーフエの総督であるブランデンブルク選帝侯ゲオルク・ウィルヘルムは、オランダ商人から七パーセントの利子で二四万八〇〇〇グルデンを借り^⑦」、この借款は長期間、ブランデンブルクを圧迫するものとなった^⑧。

②一六四二年にチャールズ一世の妻ヘンリエッテ・マリーは、ロッテルダム^{ヘッラル・シグマテン}のレーンバンクから四〇万フローリン銀貨、総督フリードリヒ・ハインリヒより三〇万フローリン銀貨、連邦議会より五万フローリン銀貨を借り出している。

一六五〇年にも、チャールズ・スチュアート、つまり後のチャールズ二世は、アムステルダムで Scilly Irland を担保に五万ポンドを借り出そうとしたが、成立しなかった⁷⁸。

③さらに、デンマーク、スウェーデン (Louis de Geer を先頭とするオランダ商人が、スウェーデンの関税・産銅を担保に貸付)⁷⁹、ポーランドの国王などもバーシュでは指摘されている^{79b}。また「オランダの海外経営はおもに東西両インド会社を中心にすすめられた」が、「オランダ資本はイギリス東インド会社の株式にも進出し、1614年には千ポンド以上の大株主は、イギリス人487名、外国人325名であった。」

以上は対外借款株式の例であるが、問題はネーデルラント自体の借金であると思われる（これについては、バーシュ「オランダ経済史」の一七四ページ以下^⑨）

フランクフルト・アン・デア・オーデル大学のヘルガ・シュッツは、国債を国別に分けているが、スチュアートとブルボンの同一性がある。しかし、一六世紀のフッガーとスペイン王室のように、バーシュが、一七世紀のオランダ債券の国際性を指摘しているのは重要ではある。バーシュが言うように、ネーデルランドでは、多くの都市で、国内人と外国人が混淆している——特に英国人のカレー・ステーブル等とスコットランドのステーブル^⑩（例えば十五世紀始めに設立されたマーチャント・アドウェンチャラーズの問題。イン

ターローパーの問題^⑪）。ネーデルランドの半国家的な歴史的特徴である。したがってネーデルランドの半王制的＝前絶対主義的な構成であること（それだけなら、類似的に、ポーランド、スイス宣誓共同体があるが）と、長期的な商業の凝集地帯であること（こゝでは、ポーランドは——ダンチヒとその周辺があるとしても——あまりあてはまらないが、スイスは——ゴッタルト街道を始めに南欧・北欧商業の結節点として——ある程度あてはまる）——異習俗集団間的（インター・エトニッシュ）——とのため、債務が国際化する。その後、一大潮流としてのポスト絶対主義的国际体制（つまり国民化的——②外国人のかんりの排除による——上層部支配機構）で、債権・債務が、比較的、国内化するのではないか？「ピューリタン革命過程は大陸の新教のそれにくらべて外国勢力の介入が皆無に近かった」と言われる。

「資本論」によれば、

「アメリカの金銀産地の発見、原住民の掃滅と奴隷化と鉱山への埋没、東インドの征服と略奪との開始、アフリカの商業的黒人狩獵場への転化、これらのできごととは資本主義的生産の時代の曙光を特徴づけている。このような牧歌的な過程が本源的蓄積の主要契機なのである。これに続いて、全地球を舞台とするヨーロッパ諸国の商業戦が始まる。それはスペインからのネーデルランドの離脱によって開始される。……………」

いまや本源的蓄積のいろいろな契機は、多かれ少なかれ時間的な順序をなして、ことにスペイン、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスのあいだに分配される。イギリスではこれらの契機は十七世紀末には植民制度、国債制度、近代的租税制度、保護貿易制度として体系的に總括される。これらの方法は、一部は、残虐きわまる暴力によって行なわれる。たとえば、植民制度がそうである。しかし、どの方法も、国家権力、すなわち社会の集中され組織された暴力を利用して、封建的生産様式から資本主義的生産様式への転化過程を温室的に促進して過渡期を短縮しようとする。暴力は、古い社会が新たな社会をはらんだときにはいつでもその助産婦になる。暴力はそれ自体が一つの経済的な潜勢力なのである。

キリスト教的植民地政策については、キリスト教の研究を専門とする人、W・ハウィットは次の

ように言っている。

『いわゆるキリスト教人種が、世界の至るところで、また自分が隷属させることのできたすべての民族にたいして、演じてきた蛮行と無法な暴行とは、世界史上のどの時代にも、またどんなに野蛮で無教育で無情で無恥な人種のもとでも、比類のないことである。』

オランダの植民地経営の歴史は——しかもオランダは十七世紀の典型的な資本主義国だったのだ——『たぐいもまれな、脊信と買収と暗殺と卑劣との絵巻を繰り広げている。』……………

公信用制度すなわち国債制度……………はまずオランダで確立された。国債、すなわち国家——専制国であろうと立憲国であろうと——譲渡は、資本主義時代にその極印を押す。いわゆる国富のうちで現実に近代的国民の全体的所有にはいる唯一の部分——それは彼らの国債である(こゝに[注]がある。ウィリアム・コベットの言うところでは、イギリスではすべての公共施設が「王立」と呼ばれるが、その代償として「国民」の債務(national debt)というものがあった——引用者)。それゆえ、ある国民の負債が大きければ大きいほどますますその国民の富は大きくなるという近代的学説は、まったく当然なものである。そして、国債制度の成立とともに、けっして赦されない聖霊にたいする罪に代わって、国債にたいする不信が現われるのである。

公債は本源的蓄積の最も力強い槓杆の一つになる。……………国債は、株式会社や各種有価証券の取引や株式売買を、一口に言えば、証券投機と近代的銀行支配とを、興隆させたのである。

……………

国債とともに国際的な信用制度も発生したが、それはしばしばあれこれの国民のもとでは本源的蓄積の隠れた源泉の一つになっている。たとえば、ヴェネツィアの略奪制度のいろいろな卑劣行為は、滅びゆくヴェネツィアから巨額の貨幣を借りていたオランダにとっては、その資本的富のこのような隠れた基礎になっている。同じ関係はオランダとイギリスとのあいだにもある。すでに一八世紀の初めには、オランダのマニュファクチュアははるかに追い越されて、オランダは支配的な商工業国ではなくなってきた。それゆえ、一七〇一——一七七六年のオランダの主要事業の一つ

は、巨大な資本の貸出し、ことに自分の強大な競争者であるイギリスへの貸出しになるのである。同様なことは、今日ではイギリスと合衆国との関係についても言える^⑧。

バレット——

「もし読者が、その空想に近いような諸々の達成から、アムステルダムの人たちは桁外れの智慧と天賦の才を持っていたに相違ないという結論を引き出すとすれば、読者はひどい誤りを犯すことになる。彼らは全く狡猾で、図太く、破廉恥であった。彼らは彼らの国の中で最も実利主義的な物質主義者であった。彼らが、たとえば一七世紀の最後の数十年以後に、その目標点に達した後には、行ないすました、立派な、満ち足りた、そしてまた一点非の打ち所のない保守主義の模範になった^⑨ことはもちろんである(注はEtienne Laspeyres: Geschichte der volkswirtschaftlichen Anschauungen der Niederlaender und ihrer Literatur zur Zeit der Republik, Leipzig 1863)。

(未完)

註

- ①塚本健「物化と自己疎外——労働疎外論の意義と限界——」雑誌「思想」一九六八年五月号 岩波書店 九四ページ
- ②広松渉「物象化論の構図」二〇〇一年 岩波現代文庫 三〇三ページ
- ③レオ・バレット(奥山秀美訳)「レムブラントとスピノザ」一九七八年 法政大学出版局(りぶりあ選書)
- ④同上 三六七ページ
- ⑤拙稿「ブランデンブルク・プロイセン覚書(中)」帝京大学経済学部紀要 二〇〇〇年十二月
- ⑥バレット同上 一〇三ページ
- ⑦ゴイド・ファン・ズヒテレン、管啓次郎訳「アムステルダムの人知ある商人」「現代思想」(特集スピノザ) 1987 9月号 93ページ
- ⑧Maurice Ashley, Das Zeitalter des Absolutismus. Von 1648 bis 1775. Wilhelm Heyne Verlag. München. Übersetzt von J. Wolfer. 1978 (The Age of Absolutism 1648-1775). S.26
1580年代の英蘭同盟の意義については、

Tibor Wittmann, Das goldene Zeitalter der Niederlande. Koehler & Amelang. Leipzig 1975 S.138ff.

⑨ ebenda. S.26

⑩ 前掲紀要

⑪ 同上

⑫ Ernst Baasch, Hollaendische Wirtschaftsgeschichte. Jena Gustav Fischer 1927.S.3

⑬ 同上バレット一〇三ページ

⑭ アントニオ・ネグリ「以下ヲ欠ク—スピノザ最晩年の民主制政体概念の定義を推察する」小林満・丹生谷貴志訳 同上「現代思想」126—128 ページ

⑭ 同上バレット 九四 - 五ページ

⑮ M.Ashly, a.a.O.,S.27f.

⑯ 同上バレット 三四七ページ

⑰ 同上バレット 三四七ページ

⑱ K・マルクス「資本論」(3) 岡崎次郎訳 大月書店 国民文庫 一九八二年 四二七ページ
原蓄の契機の一つである「近代的租税制度」—国債に続く—にふれて、次のように敘述されている。

「国債は国庫収入を後ろだてとするものであって、この国庫収入によって年々の利子などの支払がまかなわれなければならないのだから、近代的租税制度は国債制度の必然的な補足物になったのである。国債によって、政府は直接に納税者にそれを感じさせることなしに臨時費を支出することができるのであるが、しかしその結果はやはり増税が必要になる。他方、次々に契約される負債の累積によってひき起こされる増税は、政府が新たな臨時支出をするときにはいつでも新たな借入れをなさざるをえないようにする。それゆえ、最も必要な生活手段にたいする課税（したがってその騰貴）を回転軸とする近代的財政は、それ自体のうちに自動的累進の萌芽をはらんでいるのである。過重課税は偶発事件ではなく、むしろ原則なのである。それだから、この制度を最初に採用したオランダでは、偉大な愛国者デ・ウィットが彼の箴言のなかでこの制度を称賛して、賃金労働者を従順、儉約、勤勉にし…これに労働の重荷を背負わせるための最良の制度だとしたのである。……」

⑲ 同上バレット九九ページ

⑳ 同上 一〇〇ページ

㉑ 同上 一〇〇 - 一〇一ページ

㉒ 同上 一〇一 - 一〇二ページ

㉓ Franz Borkenau, Uebergang vom fendalen zum buergerlichen Weltbild (邦訳「封建的世界像から市民的世界像へ」(みすず書房、水田洋他訳 1965) S.141 - S.151 Junius-Drucke

㉔ 同上バレット 九三 - 九四ページ

㉕ T.Wittmann,a.a.O., S.141.

㉖ Henry Mechoulan, Das Geld und die Freiheit. Amsterdam im 17.Jahrhundert. (Amsterdam au temps de Spinoza. Argent et Liberte) . Uebersezt von Annette Holoch. Klett-Cotta 1992 S.133

㉗ 同上バレット 九六ページ

㉘ Reinhold Zippelius, Geschichte der Staatsidee, Verlag C.H.Bach Munchen. 1994 S.105f.

㉙ 柴田壽子論文「スピノザと政治的なもの」(工藤喜作・櫻木直文編 1995 平凡社) P.215
柳父徳太郎「国際関係と経済倫理——経済発展の宗教社会学——」東洋経済新報社(昭和35年) 110 - 111 ページ。

㉚ 同上バレット 六八 - 七〇ページ

㉛ 同上 九七 - 九八ページ

このバレットの主張は深められなければならないところである。対比的にイギリスの長老派とブラウン的セクト型教会観について、浜林正夫「イギリス民主主義史」(新日本出版社)。70ページ以後をみよ。

㉜ 同上 九八ページ

㉝ H. Mechoulan, a.a.O.,S.126

㉞ H. Mechoulan, a.a.O.,S.127

㉟ ebenda

㊱ ebenda

㊲ ebenda

㊳ Leo Kofler, Zur Geschichte der buergerlichen Gesellschaft 1948 S.204

㊴ H. Mechoulan, a.a.O.,S.128

㊵ ebenda

㊶ H. Mechoulan, a.a.O.,S.129

㊷ ebenda

㊸ マウリッツとオルデンバルネフェルトの対立に

については Wittmann, a.a.O., S.180

④⑩ 同上書バレット 三四〇 - 三四一ページ

④⑪ H. Mechoulam, a.a.O., S.141f

④⑫ ebenda

④⑬ a.a.O., S.133

④⑭ ebenda

④⑮ a.a.O., S.133f

④⑯ a.a.O., S.134

④⑰ a.a.O., S.135

柳生前掲書ユセリンクスについて 110、111、154、177 に従うべきか。

④⑱ a.a.O., S.136

また反オルデンバルネフェルト運動については、Wittmann, a.a.O., S.169ff に詳しい。なお斬首については、M.M. バグウィ「シェークスピアとその背景」(河内賢隆・兼谷英夫訳) 而立書房 1985 の P.67。ロンドンでは「犯罪者は厳しく罰せられた。…〈三百人以上が毎年絞刑に処せられ〉、……斬首は大逆罪の宣告を受けた貴族に適用される刑であった」と。

④⑲ 同上書バレット 一〇四ページ

⑤① 同上 一一三ページ

⑤② 同上 一〇五 - 六ページ

⑤③ 同上 一〇六ページ

⑤④ Von Aktie bis Zoll (Ein historisches Lexikon des geldes), hrsg. von Michael North. C.H.Beck 1995 S.61

⑤⑤ a.a.O., S.102

⑤⑥ 同上書バレット 七五ページ

⑤⑦ 同上

⑤⑧ 同上 七六ページ

⑤⑨ マイケル・ハワード「ヨーロッパ史と戦争」奥村房夫・大作訳 学陽書房 1983 P.70

⑤⑩ 同上バレット 七六 - 七ページ

⑤⑪ 同上 七八ページ

および柳生前掲書 148 ページより

⑤⑫ A・J・エイクスマン, F・W・スターペル共著 村上直次郎 原徹郎共訳「蘭領印度史」昭和十七年

⑤⑬ Fischer Weltgeschichte. Indien

⑤⑭ 同上バレット 七八ページ

⑤⑮ 同上

⑤⑯ Ernst Baasch, a.a.O., S.

なお, Karl-Friedrich Olechnowitz, Handel und

Seeschiffahrt der spaeten Hanse, 1965 Verlag Hermann Bohlaus Nachfolger Weimar は、①Handel und Seeschiffahrt Wismars nach Spanien und Portugal um 1600 ②Wismars Handel und Seeschiffahrt waehrend des Dreißigjaehrigen Krieges ③ Handel und Seeschiffahrt Rostocks in der spaeten Hansezeit ④Handel und Schiffahrt Stralsunds im 17. Jahrhundert ⑤Spaethansischer Rußlandhandel des 17. Jahrhunderts. Das Kaufmannsbuch der Rodde aus Nowogorod. は後期ハンザの諸都市を個別的に取り扱っている(なお最後のハンザ会議は一六六七年)が、アムステルダムとのいくつかの差も抽出できる。たとえば、領邦国家的制約をもたないアムステルダム (Olechnowitz, S.86—逆にロストックは制約をもつ)。一六四八年のウェストファリア条約で、アムステルダム等と異って、ハンザの国家的承認はなされなかった(同書 一〇四ページ)。アムステルダム等におけるステープル権の強さ(注 82 を参照)等々。

⑥① Baasch, a.a.O., S.161

⑥② Baasch, a.a.O.

⑥③ 同上バレット 七八 - 九ページ

⑥④ ゾムバルト「近世資本主義・第一巻 第二冊」岡崎次郎訳 生活社 昭和 18 年 P.746 及びファン・ソペーニヤ「スペインを解く鍵」平凡社選書 1986 94 - 96 ページ

⑥⑤ Von Aktie... a.a.O., S.100f.

⑥⑥ K. Marx, Grundrisse, Diez Verlag Berlin 1953 S.138

⑥⑦ a.a.O., S.148

⑥⑧ H. Mechoulam, a.a.O., S.111f

⑥⑨ T. H. Elliot, The Old World and The New 1492-1650. Cambridge Uni. Press 1970 P.60-61

⑥⑩ Elliot, P.64-65

⑥⑪ Elliot, P.68-69 なおチェコの研究者 (Miroslav Hroch, Josef Petran) が「十七世紀。封建制の危機」を出し、独訳されている (Das 17. Jahrhundert. Krise der feudalen Gesellschaft. uebersezt von Eliske u. Ralph Melville. 1981 Hoffmann und Campe)。第一章は、その論争史で、このケンブリッジの、エ

リオットも、そのなかで引用されている
Chaunu も何回か登場している。

- ⑦ Baasch, a.a.O., S.194
- ⑦ 同上バレット 八〇ページ
- ⑦ Baasch, a.a.O., S.194
- ⑦ Baasch, a.a.O., S.195 同上バレット 八〇
ページ
- ⑦ 前掲 Wittmann, a.a.O., S.163
- ⑦ Baasch, a.a.O., S.
- ⑧ Baasch, a.a.O., S.174f.
- ⑧ Baasch, a.a.O., S.257ff. カレーステーブルに
ついては張漢裕「イギリス重商主義研究」岩波
書 昭和 29 年の附一 ステーブル及びステー
ブル商人の歴史を参照のこと
- ⑧ Baasch, a.a.O., S.257ff.
- ⑧ 「資本論」同上書 四一八 - 四二六ページ
- ⑧ 同上バレット 八一ページ

〔付記〕これに続き、バレットの⑥道德について触
れ、次に注にあるレオ・コフラー論文、そしてゾ
ムバルトのアムステルダム証券取引所におけるユ
ダヤ人を中心とするスペキュレーションと物象化
生成過程の分析を予定している。

(以上)